

認知症地域支援推進員

# 活動情報集

地域  
共生編

～知恵と工夫を、共有！それぞれの地域ならではの共生の実現を～

2023年3月版



社会福祉法人浴風会

認知症介護研究・研修東京センター

2022年度厚生労働省 老人保健事業推進費等補助金  
老人保健健康増進等事業

## はじめに

全国の市町村で  
認知症地域支援推進員が、試行錯誤しながら活動をしています。

人も、社会、認知症施策も、変化をし続けており、  
＜認知症になってからも、自分らしく地域でともに生きる＞  
地域共生の実現を目指す時代になりました。

地域共生は、「いつかそのうち……」の遠いことではありません。  
各地の推進員が、日常業務の中で、“少しの工夫”をしながら、  
地域共生を実現し始めています。  
＜小さな村でも、大都会でも＞



推進員のみなさん、活動の照準を地域共生にまっすぐとあてて、  
無理や無駄なく、それぞれのまちなのでは地域共生を  
日々のなかから、生み出していきましょう。  
この活動情報集を、ぜひご活用下さい。

認知症地域支援推進員 **活動情報集・地域共生編** (2023年3月版)

～知恵と工夫を、共有！それぞれの地域ならではの共生の実現を～

## 目次

はじめに	
この活動情報集の目的と使い方	1
活動情報	5

### I 本人とともに、人や事業等をつなぎ、地域共生を日々の中で

1. 相談にきた本人が声と力を発揮しながら、身近な地域をいっしょに暮らしやすく  
本人とともに他人事、縦割り、単発的な取組みを超えながら …………… 9  
香川県・綾川町 地域包括支援センター 川崎孝至（兼任 精神保健福祉士）  
綾歌地区 在宅医療介護連携支援センター 増田玲子（兼任 社会福祉士）
2. 認知症の人とともに築く総活躍のまち“ごぼう”  
～条例・基本計画を指針に「本人の声」を起点に本人とともに進める共生のまちづくり～ …………… 13  
和歌山県・御坊市 市民福祉部介護福祉課 谷口泰之（行政事務職）・丸山雅史（社会福祉士）  
在宅介護支援センター藤田 玉置哲也（介護支援専門員）
3. 本人を含め地域の仲間と、一緒に過ごし、一緒に悩み、一緒に考え、一緒に行動  
～ちょっとした工夫で、楽しい活動を、みんなで～ …………… 17  
静岡県・富士宮市 福祉企画課 地域包括ケア推進係 杉浦綾乃（専任・任用、社会福祉士）
4. 認知症の人とともに築く地域  
～一人との出会いや声を大切に、地域に溶け込み、暮らしやすいまちを一緒につくる～ …………… 21  
静岡県・藤枝市 健康福祉部 地域包括ケア推進課 横山麻衣（専任 作業療法士）
5. 「おれんじドア」を本人ともに創る  
～一人でも多くの方が、希望をもってともに暮らしていけるように～ …………… 25  
鳥取県・鳥取市 中央包括支援センター 金谷佳寿子（専任 介護福祉士）
6. 地域密着型サービス事業所をベースに、出会い、つながり、“ともに生きる”を広げる  
～本人の声、身近な人の声から、望みをかなえる挑戦をともに～ …………… 29  
東京都・品川区 社会福祉法人新生寿会 きのこ地域連携室 鈴木裕太（兼任 認知症介護指導者）

## II 本人視点にたって人や事業等をつなぎ、地域共生を一步一步

7. そこに暮らす人と住みたい地域を一緒につくる  
～地域の住民力とともに、あるものをつなぎ活かしあいながら、草の根で、息長く続ける～ …… 35  
鹿児島県・大和村 保健福祉課・地域包括支援センター 早川理恵（兼任）
8. 出会い・語り合い・ともにはたらきながら、地域共生を無理なく、自然体で広げる  
～農園を地域共生の推進拠点として、人と地域、事業をつなぐ～ …… 39  
新潟県・湯沢町 健康増進課・湯沢町地域包括支援センター 國松 明美（兼任 保健師）  
アクション農園倶楽部担当 林 君江（囑託）
9. 本人が輝く姿が、地域を変える、地域が育つ  
～人も、ペットも、共に安心して生き生き暮らせる町づくり～ …… 43  
岩手県・矢巾町 矢巾町地域包括支援センター・えんじょいセンター 鱒沢陽香（専任 社会福祉士）
10. カフェから飛びたて！ 本人の望みを地域でともになえ、活躍のバトンをつなげる  
～コロナ禍等のピンチを、地域での新たなチャンスに変える～ …… 47  
神奈川県・大和市 上草柳・中央地域包括支援センター 石毛幸子（兼任 保健師）

推進員活動情報共有フォーマット

51

推進員活動の情報共有・ネットワークを通じて、推進員機能を高めよう  
すいしんいんネットの紹介

55

# この活動情報集の 目的と使い方



# 1. この活動情報集の目的

- ◇ この活動情報集\*は、それぞれの市町村に配置された認知症地域支援推進員が、推進員機能を強めて、よりスムーズに、より楽に、そしてより効果的に、活躍していくための参考情報を、推進員同士で共有していくことを目的としています。
- ◇ 今回の2023年度3月版の活動情報集では、現在大きなテーマとなっている「地域共生の実現」にむけて取り組んでいる10地域の推進員から提供いただいた活動情報を、標準フォーマットに集約し、関連する写真や資料もあわせて掲載しています。
- ◇ 「地域共生の実現」は、いつかそのうちの大ごとではなく、推進員が日常的に行うちょっとした活動を通じて、一步一步、実現に近づいていきます。その手がかりを、各活動情報に記載されている活動のきっかけや活動の展開、そのプロセスの中で注力した点や工夫等から得ていただき、それぞれの地域の推進員が、それぞれが持っている力を発揮しながら、その地域ならではの活動を展開していかれることを願っています。
- ◇ なお今後、それぞれの地域の推進員のみならずからの活動情報の提供をもとに、活動情報の蓄積や更新をしていきます。推進員としてやってみたらならでの知恵や工夫等を推進員同士で伝達・共有しあい、それぞれの地域で、そして全国どの地域でも、推進員がやりがいをもって、よりよい活動を展開していくための情報共有のしくみを一緒に創り、育てていくことを目指しています。

\* 令和4年度厚生労働省老人保健事業「認知症地域支援推進員の配置形態や活動実態に応じた機能強化に関する調査研究」で実施した全国調査、活動事例調査、検討委員会検討結果をもとに作成。

# 2. この活動情報集の使い方

## 1) 推進員の経験や活動状況に応じて

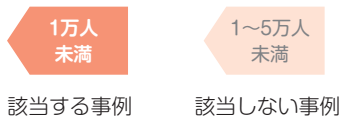


- ・ 配置されて日が浅い人は、推進員活動のイメージを広げ、推進員の立場を活かしてできそうなこと、楽しくやれそうなことを見つけて下さい。活動で大切にしていることや、最初の一步などをぜひ参考に。
  - ・ ある程度経験を積んだ方は、これまでの活動を振り返り、方向性や活動で注力する点、つながる相手など、活動を補強していく参考情報を見つけて、新たな一步を踏み出すきっかけにして下さい。
- ★推進員ご自身はもちろん、行政担当者や関係者の方にもこの情報集を紹介し、一緒にご活用下さい。

## 2) この冊子では、以下の2テーマの実践をしている活動情報を、人口規模の小さい順に掲載しています。

- I. 本人とともに、人や事業等をつなぎ、地域共生を日々の中（6地域の活動情報）
  - ★本人が活動の企画等に参画しながら、本人とともに活動を展開
- II. 本人視点に立って人や事業等をつなぎ、地域共生を一步一步（4地域の活動情報）
  - ★日常の活動を本人視点で進め、本人の力を活かしながら活動を展開

- ・ いずれも小さな、基本的な取組みの積上げをしている活動です。お気軽にお読みください。
  - ・ 各事例に、キーワードをつけてあります。また、各事例の1ページ目右端に、自治体の人口規模や推進員の配置形態などを色分けしたインデックスが印刷されています（下記、参照）。
- 皆さんの状況やニーズに応じて、活動情報をお読みいただき、今後の活動にお役立てください。

### 【インデックスの見かた】

人口規模の区分	インデックスの例
○ ～1万人未満 ○ 1万人～5万人未満 ○ 5万人～10万人未満 ○ 10万人～20万人未満 ○ 20万人以上	
推進員の配置先の区分（自治体全体で）	インデックスの例
○ 行政（本体）・直営型地域包括支援センター ○ 委託型地域包括支援センター ○ その他（介護事業所等） ※自治体で複数の推進員が異なる組織に配置されている場合、該当するインデックスすべてが濃くなっています。	
推進員の配属形態の区分	インデックスの例
○ 専任 ○ 兼任	



## 4. 留意点

### (1) データの基準日

人口、高齢化率など自治体に関するデータがいつ時点のものか、「自治体情報」のタイトル横に記載してあります。その他の記述内容や写真等、特記がなければ、この活動情報集の作成時期である「2023年2月現在の状況」です。事例に関連する情報を掲載したURLやQRコードも同様にこの時期に確認したものです。

今後、リンク先の都合でそのページが更新・移動・削除されている場合がありますので、ご了承ください。

### (2) 用語の表記

専門用語や長い単語は、文中では以下のように略したり別の呼び方で表記している場合があります。

・認知症地域支援推進員 → 推進員	・介護支援専門員 → ケアマネジャー、ケアマネ
・地域包括支援センター → 包括	・通所介護 → デイサービス
直営型地域包括支援センター → 直営包括	・訪問介護 → ホームヘルプ、ホームヘルパー
委託型地域包括支援センター → 委託包括	・小規模多機能居宅介護事業所 → 小規模多機能
・社会福祉協議会 → 社協	・認知症カフェ → カフェ
・認知症疾患医療センター → 疾患センター、疾患医療センター	・介護予防・日常生活支援総合事業 → 総合事業
・在宅医療介護連携センター → 在宅医介センター	・認知症サポーター養成講座 → 認サボ講座
・認知症初期集中支援チーム → 初期集中	・認知症本人大使「希望大使」 → 希望大使

## 5. 推進員活動の情報共有フォーマット

\*この活動情報集で使用した活動情報の共有フォーマットを、この冊子の巻末に掲載しています。

推進員活動の集約や、それぞれの地域での行政と推進員（同士）の情報共有、関係者や地域の人たちに向けた推進員活動のPR等をする際の参考としてご活用ください。

※フォーマットのデータは、下記のDCnetからご入手いただけます。

\*全国の他地域の推進員に、「自地域での推進員の活動情報を共有したい、情報交換したい」という方がおられましたら、ぜひ、認知症介護研究・研修東京センター 認知症地域支援推進員担当にご連絡下さい。

**認知症介護研究・研修東京センター 認知症地域支援推進員担当**  
連絡先 [r.tokyo@dcnet.gr.jp](mailto:r.tokyo@dcnet.gr.jp)

## 6. 関連情報

この「活動情報集」および推進員活動に関連した情報や「活動ガイド」等を、当センターのホームページDCnetの「認知症地域支援推進員」ページからご覧いただけます。

<https://suishinin.jp/suishinin/index.php>

この活動情報集とあわせて、どうぞご活用下さい。

## 7. 推進員同士のネットワーク

全国の推進員同士が自主的に立上げ、情報交換や交流をしているネットワーク「すいしんいんネット」があります。推進員の活動をしているからこそわかりあえること、伝えられること、支えあえることがあります。どうぞご参加下さい。

巻末の「すいしんいんネット」をご参照下さい。



# 活動情報





## I 本人とともに、人や事業等をつなぎ、地域共生を日々の中で

事例No. 1. 相談にきた本人が声と力を発揮しながら、身近な地域をいっしょに暮らしやすく  
本人とともに他人事、縦割り、単発的な取組みを超えながら

香川県・綾川町 地域包括支援センター 川崎孝至（兼任 精神保健福祉士）  
綾歌地区 在宅医療介護連携支援センター 増田玲子（兼任 社会福祉士）

2. 認知症の人とともに築く総活躍のまち“ごぼう”

～条例・基本計画を指針に「本人の声」を起点に本人とともに進める共生のまちづくり～

和歌山県・御坊市 市民福祉部介護福祉課 谷口泰之（行政事務職）・丸山雅史（社会福祉士）  
在宅介護支援センター藤田 玉置哲也（介護支援専門員）

3. 本人を含め地域の仲間と、一緒に過ごし、一緒に悩み、一緒に考え、一緒に行動  
～ちょっとした工夫で、楽しい活動を、みんなで～

静岡県・富士宮市 福祉企画課 地域包括ケア推進係 杉浦綾乃（専任・任用、社会福祉士）

4. 認知症の人とともに築く地域

～一人との出会いや声を大切に、地域に溶け込み、暮らしやすいまちを一緒につくる～

静岡県・藤枝市 健康福祉部 地域包括ケア推進課 横山麻衣（専任 作業療法士）

5. 「おれんじドア」を本人とともに創る

～一人でも多くの方が、希望をもってともに暮らしていけるように～

鳥取県・鳥取市 中央包括支援センター 金谷佳寿子（専任 介護福祉士）

6. 地域密着型サービス事業所をベースに、出会い、つながり、“ともに生きる”を広げる  
～本人の声、身近な人の声から、望みをかなえる挑戦をともに～

東京都・品川区 社会福祉法人新生寿会 きのこ地域連携室 鈴木裕太（兼任 認知症介護指導者）



相談にきた本人が声と力を発揮しながら、身近な地域をいっしょに暮らしやすく  
本人とともに他人事、縦割り、単発的な取組みを超えながら

香川県・綾川町 地域包括支援センター 川崎孝至（兼任 精神保健福祉士）  
綾歌地区 在宅医療介護連携支援センター 増田玲子（兼任 社会福祉士）

キーワード：相談、本人ミーティング、社会参加、住民主体、チームオレンジ、ケアパス、行方不明、希望大使、共生

1万人  
未満

1~5万人  
未満

5~10万人  
未満

10~20万人  
未満

20万人  
以上

行政/  
直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

●推進員活動情報ダイジェスト

<自治体情報> 2022年4月1日時点  
◇人口 23,447人 ◇高齢化率 36.1%  
◇圏域数 1 ◇包括数 1（直営）

<認知症施策のビジョン・方針等>  
・町ぐるみで支え合いながら、人生の集大成ともいえる大切な時期を、認知症になってもその人らしく尊厳を持って暮らしている町に  
・本人視点で、いつでも、どこでも、誰もがともに  
・人、活動、事業をつなげよりよく暮らす道を創る

<推進員の主な活動>  
①本人の経過に沿った支援の強化（特に初期段階）  
・活躍の場づくり ・本人ミーティング  
・個別への丁寧な対応  
②人を育て、活動を支え、それらをつなぐしくみをつくる

<今回報告する活動>  
相談に来た一人の本人とともに、本人の声と力を活かしながら本人ミーティング、本人発信、地域活動拠点づくり、誰もが活躍する場づくり、チームづくり等を一貫して進め、地域共生を日常的・具体的に進めている活動

<推進員の配置状況> 2014年度より配置  
◇5人：兼任5（直営包括4、在宅医介連携センター1）  
\*包括から連携センター勤務となった職員が、引き続き推進員として、包括の推進員をバックアップ。

<行政と推進員との関係づくり・協働>  
・推進員から施策担当部署内・上司に、本人の声や本人とともに活動していく中での嬉しいエピソードや課題を日常的に伝え本人視点や本人の声を大切にする方針を共有。  
・上長も時折本人の集まり等に参加。現場重視での協働。

<活動のプロセス>  
本人が集まりたくなる本人ミーティングを本人志度谷さんのアイデアをもとにスタート。本人の声を活かす会を開催。志度谷さんが暮らすエリアで住民らとともに活動拠点「育育広場」をつくり、身近な地域の中で社会参加・活躍する機会や多世代交流を継続的に展開。志度谷さんは話しづらくなってきているが、推進員が本人発信を支えている

<活動を通じた変化・成果>  
住民主体の活動やチームが育ち、身近な地域で社会参加・活躍を続ける本人が増え、多世代の共生が年々拡充しつつある。

●推進員活動のシーン

相談にきた一人の本人とともに、本人たちが集まりやすい企画をたてて、楽しい本人ミーティングがスタート



堅苦しいチラシでは、参加する気が湧かない。つまらないと話しもでない。本人のアイデアをもとに企画。チラシも一緒に作成。



当日、話しあいの前に、まずはお好み焼きで一緒に楽しく。本人たちが、見事な手つきで活躍。行政職員が驚く。職員が、認知症の人に先入観をもっていったことに気づく。



課長も参加（をお願いした）。役所の中だけにいるとなかなか出せない本人たちと楽しい一時を過ごす。施策を実質的に進めていくための貴重な体験となる。



小さなまちだが、本人が8名参加（民生委員、医療機関、ケアマネ、介護事業所などに幅広くPRし、多様なルートを通じて）。お好み焼きで気分がほぐれ、各自から思い思いの声がでる。

本人ミーティングでの声を活かして、本人が地域の人たちとつながり、活躍。本人がチームの仲間と活動を継続中



何ができるか、地域で本人と一緒に、楽しくアイデアを出し合う。



本人が得意な木工製作。地域の人が本人に教えてもらう。



完成した製品を保育園に寄贈。子供たち、親御さん、先生が大感謝。



畑での栽培、収穫、焼き芋大会が恒例行事に。多世代が共に。



志度谷さんとともに。これまでも、これからも。年代も立場もさまざまなチームSの仲間たち。

# 相談にきた本人が声と力を発揮しながら、身近な地域をいっしょに暮らしやすく 本人とともに他人事、縦割り、単発的な取組みを超えながら

## 1 この活動の背景・きっかけ

若年性認知症の志度谷さんが妻と一緒に包括に相談に来所。妻の話を聴きつつ、本人にも語ってもらう。

妻：店舗作りの自営の仕事をしているが、診断を受けてショックで夜も寝ない。どうしていったらいいのかわからない。

本人：これからどうなってしまうか落ち込む。夜中に不安でならなくて妻を起こしてしまう。働きたい。

## 2 この活動のプロセス：最初の一步、その後の展開

### <他地域の本人との出会い、そしてわが町での本人ミーティングへ>

- ・わが町でも本人ミーティングを立ち上げたい、とちょうど考えていた時だった。
- ・そのための情報交換会が県外であるとのことで、思い切ってお夫妻を誘ってみる。
- ・藁にもすがる思い、とお夫妻が参加。他市で元気に活躍している本人に出会い、本人は「すっかりした自信が湧いた」、妻も「目の前がぱーんと開けた」と。
- ・本人に「本人同士が集まって話しあう集まりを開きたい。協力してくれないか」と頼んでみた。
- ・近くにあるといいな、とお夫妻とも前向き。推進員の企画では「堅苦しい…」と、志度谷さんからもっとわくわくして、行ってみたいと思えて、行くと楽しい集まりにしようとアイデアが次々に出る。会の名称、チラシ、当日の進行も一緒に相談して、本人ミーティングが始動。

### <本人ミーティングでの声を活かし、地域で本人中心のチームSを結成、活動を展開>

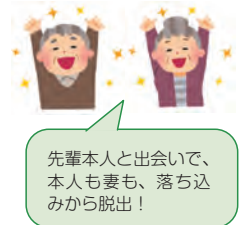
- ・志度谷さんの「地域の人とつながりたい。働きたい」という声をもとに、お夫妻が暮らす団地で地域活動を長年続けてきている三井さんら地域の人たち、推進員、包括担当課課長と職員が、お夫妻とともに「本人の声を活かす会」と称して話し合いを重ねる。
- ・志度谷さんがやりたい得意な手作業をいっしょにやりたい人を団地で募って、まずは活動を始めてみようということになる。つながりたい、何かやりたい、ときっかけを待っていた男女が約20人も集まる。活動の拠点として団地内にある元保育園の子育て交流施設のスペースを借り、育育広場という名称でスタート。
- ・育育広場を拠点に、志度谷さんや他の本人たち、仲間たちが毎週1回集まり、それぞれができるモノづくり、子供たちや若い世代と一緒に畑仕事や収穫を楽しむ活動を継続。
- ・一緒に創った木工製品を、町内の保育園に寄贈。非常に喜ばれ、交流が生まれる。

### <本人の声を、他のさまざまな施策・事業に活かす>

- ・志度谷さんが体験や思いを地域の住民や専門職、行政に発信する機会を作ってきている。
- ・初期集中支援チームのPRの協力をS夫妻に依頼。チラシ表紙を夫妻が飾る（右）。
- ・志度谷さんと取組んできた体験をもとに、ケアパスを本人視点で改良。経過とともになじみの地域の中で、多様な地域の人たちと専門職がつながりながらネットワークがだんだん広がっていくケアパスとした。ケアパスを通じて町民が希望を持てるようになることを。

### <志度谷さんの状態の変化、行方不明の不安にみんなで見守り、本人発信支援を継続>

- ・志度谷さんは、一日平均8000歩の散歩を一人で続ける。道に迷い行方不明の心配が高まる。
- ・夫妻と三井さんら仲間たち、推進員とで、志度谷さんの経路をベースに話し合いと工夫を重ねる。
- ・志度谷さんが県の希望大使に任命され、県内外での発信支援の窓口とお伴を推進員Aが行っている。



先輩本人と出会い、本人も妻も、落ち込みから脱出！



本人の声を活かす会職員



活動拠点「育育広場」誕生  
看板を手作り



志度谷さん中心のチームの  
男性陣



初期集中支援チームの  
広報の表紙に

## 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ◆お夫妻と、つきあい続ける。会いに行き、何気ない会話を楽しんだり、一緒に悩む。
- ◆無理と決めつけず、やるかどうかは、本人にきく。本人、家族や仲間たちと、どうしたらできるか相談する。
- ◆揺らぎを支える。本人、家族、住民、医師や医療・福祉・介護の専門職、行政職、みんな不安になりがち。とにかく話をよく聴く。些細な情報が推進員に入るよう「何でも言うてくださいね」とお願いしている。
- ◆本人の声を記録に残す。ケア関係者にも声の記録を勧め、一緒に本人視点で検討し、対応力向上を図る。
- ◆いい対応やエピソードはみんなに共有。方向性の共有やモチベーションアップ、対応力向上に活かす。
- ◆保健・医療・福祉・介護・地域活動等の事業や関係者とのつながりを常に意識し、ひたすらつながる。

## 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- ・他人事、縦割り、単発的取組という壁が常にあるが、本人の声を通じて、立場を超えて発想や取組が変化していく。
- ・認知症カフェやチームオレンジ、本人と家族の一体的支援など新事業が示される度に悩むが、町の様々な人達がこれまでやってきている中に、類似のより確かな動きがあり、それらを伸ばすために事業を活かしている。

## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】

- ・志度谷さんは、少しずつ言葉を発しにくくなっているが、年数を重ねながら育ってきているチームSの仲間たち、そこを通じて派生している地域のつながりの中で、日々地域に出かけ、志度谷さんならではのユーモアのある発信や活躍を続けている。
- ・志度谷さんの他にも、本人がチームの仲間とともにつきあう時間や体験を重ねながら、地域とともに暮らし続ける本人が増えてきている。
- ・身近な地域の中で誰もが入りやすい育育広場に、まだ誰にも相談できていないで不安を抱えている（未受診の）人が、地域の人に誘われて通い始める場合が年に数件ある。志度谷さんが、認知症のことをあっけらかんと喋ったり、仲間たちと元気に楽しそうに過ごしている様子に触れることで、少しずつ心を開き、相談や受診につながり、その後も育育広場の仲間とのゆるやかなつきあいが続いている。

### 【家族】

- ・志度谷さんの妻：志度谷さんが認知症になったことを契機に、地域でのつながりが格段と広がり、仲間の力を借りて仕事を継続しながら志度谷さんとの在宅生活を続けている。
- ・志度谷さんの状態が変化したり、ハラハラするようなことが増えてきているが、「おとうちゃんや私のことをみんながよく分かってくれるから」、と隠し立てをせずに、以前にもまして相談したり、SOSを出すようになってきている。
- ・他の家族が、志度谷さんの妻に勇気づけられ、早めに相談したり、地域に伝える人が増えている。

### 【地域の人】

- ・育育広場を拠点にした活動を通じて、志度谷さんが暮らす団地のエリアで、リタイヤして家にこもりがちだった男性やつながりの薄かった女性たち、また子供たちや若い親世代の人たちのつながりの輪が年々広がってきている。それぞれの特技やできることを活かして、活躍する人や活躍の幅が広がっている。
- ・育育広場のスタート時期は、行政や推進員がかなり関わって運営していたが、年々、三井さんを中心に住民同士による自主的な運営が定着してきている。
- ・コロナ禍でも、感染拡大対策を話しあいながら、集まりを絶やさずに続けている。
- ・志度谷さんの一人での自由な散歩を、ふだんの仲間たちに加えて、その知り合いや地域の人たちがゆるやかにつながって、いっしょに散歩を楽しみながら、安心・安全を支えている。

### 【専門職・行政】

- ・志度谷さん夫妻の発信や育育広場の活動、一連の取り組みを通じて、ケアマネやケア関係者が、本人の声を大切にすること、本人視点で一緒に考えることが浸透してきている。
- ・主治医（認知症専門医）が、サポーターのステップアップ講座で、「志度谷さんと一緒にいる。それでいい」と参加者に語る。「ともに生きる」の理解を深め、みんなで進むひと言となった。
- ・行政では、育育広場の活動等を通じて、介護予防・地域支援と介護、医療と地域支援と介護、高齢と子育て、警察など、担当を超えた連携・協働が具体的になされるようになってきた。

### 【情報の流れや協働】

- ・地域住民やケア関係者、他分野から、気がかりな人について早めの相談が増えてきている。



オンラインで発信。  
中央がS夫妻。右が育育広場  
代表Mさん。左端が推進員。



元保育園での育育広場。  
園庭での畑仕事なども。  
開放的で様々な立場や  
年代の人が集まってくる。



自由に、安心・安全に散歩を  
楽しめるように  
ゆるやかに、いっしょに



【志度谷さんの主治医】  
志度谷さんと一緒にいる。  
それでいい。

## 6 今後の展望

☆認知症になる前、なってから、最期までどの時点でも、なじみの地域で支えあう仲間とともに暮らせる地域に

- ①認知症になる前から地域でつながり、身近な仲間、支えあえる人を増やす。
- ②認知症になっても どんどん地域に出ていこう！新しいなじみも作ろう！
- ③認知症が進んでも、なじみのつながりを大切に、住み慣れた地域で暮らそう！ 今後は特に③を強化

### この活動を通じて見えてきたポイント

本人が前向きに暮らしていくためのきっかけとして、先輩本人と出会う機会をつくる（他市の本人の力も借りる）。

相談で出会う一人の本人とともに取組むと、事業を進めるアイデアや具体策が見つかる。本人の思いと言葉を真ん中に置き続けること。

町全体での取組みを焦らずに、出会えた本人とともに、暮らし身近な地域人たちとのつながり、住民力を丁寧に活かす。小さな成功体験を積み重ねていくことが、実質的な共生実現の近道。

担当分野にとらわれ、専門職同士が知らない間に切れ目を作ることをないように。何を目指しているのか、お互いが認識や全体像を共有しながら働けるよう、そのことを行政・推進員が伝え続ける。

地域の様々な分野の人たち／機関が生み出してきていることやすでにあるものを知り、本人視点で必要なことを一つひとつ、つないでいく。

推進員が異動しても、推進員／推進役として活躍を続けられる体制・環境をつくる。自治体としての推進員機能が蓄積・持続し、異動先での新たな取組も含めて、推進員機能が拡充し発展していく。

## 町のつながりの広がりと深化(進化)

**町民も専門職も本人の声を大切に、なじみの地域で思いを持って動き続けている。**

サポートを核としたネットワークづくりの鼓動

お話ボランティア：入所しても顔見に来るデー。

自分でもチェック！地区医師会と共同で作成し、町内の医療機関においています。

顔の見える関係の中で

一人ぼっちをゼロに認知症の初期の気づき

本人が安心して語り、伝えわくわくして元気になる本人ミーティング

地区医師会の協力で多職種事例検討会を年4回実施。2月にはロールプレイも、「本人が安心してその人らしく暮らすための事例検討会！」という目標も明らかになってきた。

本人の思いや言葉を真ん中に置き続けること

綾川町認知症ケアパスのイメージ図：経過とともに、多様な地域の人や専門職がつながり、希望がもてるケアパスを

## 地域に溶け込んでいる人・つながりを探しながら

常連客を大切にしているカフェ

サービス提供中以外でも見守ってくれているデイのスタッフ

家族からの相談に応じ見守ってくれている金融機関(認知症サポーター養成講座を受講)

詐欺被害に遭いかけたところを気づいてくれた警察

習い事の仲間

よく声をかけてくれる近所の親戚

ひとり暮らしの本人の事例

県外だが気がかけてくれる弟たち

ワクチンの予約・接種をいっしょに動いてくれる友だち

花見など定期的に誘ってくれる友だち

最近になり、徐々に通帳の管理の話も、徐々に・・・

綾川町

推進員：地域の中で息づいているネットワークに、時にしっかり、時にゆるく、つながり続ける



**認知症の人とともに築く総活躍のまち“ごぼう”**  
～条例・基本計画を指針に「本人の声」を起点に本人とともに進める共生のまちづくり～

和歌山県・御坊市 市民福祉部介護福祉課 谷口泰之（行政事務職）・丸山雅史（社会福祉士）  
在宅介護支援センター藤田 玉置哲也（介護支援専門員）

キーワード：本人の声、発信支援、社会参加、認知症バリアフリー、認知症コーディネーター、条例、希望大使、総活躍

1万人  
未満

1～5万人  
未満

5～10万人  
未満

10～20万人  
未満

20万人  
以上

●推進員活動情報ダイジェスト

**<自治体情報>** 2022年3月31日時点  
◇人 □ 22,030人 ◇高齢化率 32.8%  
◇圏域数 6 ◇包括数 1（直営）

**<認知症施策のビジョン・方針等>**  
本人の声に耳を傾け、本人の視点にたち、認知症になっても自分らしく暮らせる総活躍の地域作り  
（御坊市認知症とともに築く総活躍のまち条例）

**<推進員の主な活動>**  
日常業務を通じて①認知症の人への先入観の払拭、②本人の声の起点とした地域協働によるよりよい暮らしの実現、③暮らしやすさの向上（バリアの解消）など。

**<今回報告する活動>**  
本人の声から社会参加の機会をつくりながら、本人のいい日々を実現する地域協働を広げる取組み

**<推進員の配置状況>** 2012年度より配置  
◇8人（兼任）：直営包括、在介、認知症デイ、小多機  
\*役所と、推進役となる人材がいる場に配置  
\*ともに動く認知症コーディネーターが約20名。

**<行政と推進員との関係づくり・協働>**  
月1回コーディネーター会議。気軽な付き合いを大切に。本人の声、活動の経過や変化を楽しく共有している。

**<活動のプロセス>**  
A. スーパー銭湯とともに本人が交流できる場をつくる。  
B. 施設に来てくれた高校球児に「恩返ししたい」という声から本人たちが高校に激励に行く機会をつくる。

**<活動を通じた変化・成果>**  
A. 銭湯で本人と家族、住民とのほっと一緒が実現。本人の声をもとにバリアフリーが次々と生まれている。  
B. 本人たちの活躍と球児との日常的な交流に発展。

行政/  
直営包括

委託包括

その他

●推進員活動のシーン

A. スーパー銭湯の人たちと協力して、「ごぼう ホットサロン」を月1回開催



のんびり楽しく語りあう



湯上りの一杯はうまい！



ひ孫も参加し、いっしょに、ごろ寝



本人の声から、みんながわかりやすい表記に。  
間違っ人が激減！銭湯の人も喜ぶ

専任

兼任

B. 本人たちが高校球児を大会前に激励に行く



本人たちが激励の言葉を書いて読み上げる。  
球児たちの大きな力に。交流が続いている。



本人たちが心を込めて折った千羽鶴を手渡す。  
「頑張れ」の文字も書道が得意な本人が。

# 認知症の人とともに築く総活躍のまち“ごぼう”

～条例・基本計画を指針に「本人の声」を起点に本人とともに進める共生のまちづくり～

## 1 この活動の背景・きっかけ

推進員が、日常の中で、本人と一緒にいるときに、本人たちがつぶやいたひと言。

- A. たまにはゆったり、風呂に入りたい。みんなと楽しく喋りたい。
- B. (施設に高校球児が来てくれたことを、本人たちが大喜びし) 恩返しをしたい。

## 2 この活動のプロセス:最初の一步、その後の展開

- A. 声を推進員、認知症コーディネーターで共有。実現するためのアイデアを出し合う。
  - ・ 本人たちにもなじみの地元のスーパー銭湯で本人たちがあつまれたらいいなあ、というアイデアがでる。みんなが、「いいね!」と賛同。
  - ・ 行政の推進員が、早速スーパー銭湯に行き、店長に「本人たちの集まりを開きたい」と相談してみる。
  - ・ 店長は二つ返事で、「どうぞ」と。「なじみのお客さんの中にも気がかりな人がいる。ここでそうした集まりが開かれたら、お客さんたちにもいいし自分たちもうれしい」と協力的(右、スーパー銭湯)。
  - ・ 銭湯のお客が少ない曜日時間帯を相談し、開催日を決める。
  - ・ コーディネーターが関わっている人を中心に声かけし参加を募る。
  - ・ みんなのイメージをまとめて、「ごぼうホッとサロン」という名称に。
- B. 声を推進員、認知症コーディネーターで共有。本人たちが千羽鶴を折って高校に行って応援できたらいいね!というアイデアが出る。
  - ・ 本人たちに意見を聞いたら、「千羽鶴を届けに行きたい!」という人がたくさん。
  - ・ 高校に出向き、「恩返ししたい、高校に応援に来たいと言っている」と伝える。先生も喜ぶ。
  - ・ 都合のいい日時を決める。その日を本人たちが心待ちに。応援メッセージを一生懸命に書く。



## 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ・ 二つの活動とも、それぞれの推進員や認知症コーディネーターが、日常の中での本人の何気ないつぶやきを大切に聴いていること。
- ・ 聴いたつぶやきを、行政担当者や推進役の仲間に伝え、共有していること。
- ・ 聴いておしまいせず、本人の望みを、なんとかかなえられないか、前向きに、自由なアイデアを出しあっている。
- ・ 出たアイデアを大事にして、みんなが意見を言いやすい空気をつくっている。
- ・ アイデアをあわせながら、できそうなことから、動ける人がすぐ動き出すようにしている。
- ・ 自分たちだけでやらずに力を貸してくれそうな人、協力してほしい地域の人たちに、出向いていく。
- ・ 「本人の声」をリアルに伝えながら、本人の思いやのぞみを、まずわかってもらうようにしている。
- ・ 協力者の気づきやアイデアもよく聞いて、できることを無理なく、いっしょに楽しくやっている。

Aでは、スーパー銭湯の店長や職員が、当日の配慮をいろいろ考えてくれた。  
Bでは、高校の先生が、当日の場所や本人と高校生がともにいい時間になるためのシナリオを、いっしょに考えて調整してくれた。

## 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- A. 本人たちが銭湯で安心・安全に入浴できるようにサポートしてくれる人の確保が必要だったが、一緒に企画してきたことで、推進員やコーディネーター(ケア専門職)が自ら申し出て協力してくれた。
  - ・ 行政の推進員も当日、一緒に入浴したいので、休暇願を出したが、上司から「大事なことから、仕事としていけ」と業務命令。湯上りのビールを飲みたかったが、残念ながら断念。
  - ・ 事故が起きないように事前の配慮や準備をし、上司から「もし何かあったら、俺が責任とるから」と。
- B. 当日、施設の本人たち約10名が高校に行くまでの足の便を確保する必要があったが、コーディネーターがいる施設側がいい取組みだからと賛同してくれ、当日送迎車で送迎してくれた。

## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### A. スーパー銭湯との活動を通じて

【本人】町の人たちの人気スポットなので本人たちも喜んで参加。いい湯につかってうれしそうで、ふだん以上に会話も弾んだ。家族ともゆったりといい時間を持って、次回を楽しみに待つ声が聞かれた。

【家族】ゆっくり入浴してリフレッシュされ、本人がふつうに入浴や仲間たちと楽しむ様子を見て、こうした時間を持つことの大切さを語っておられた。

【地域の人】銭湯の店長、スタッフは、自然体での本人とつきあい方を体験し自信や受け入れアップ。ボトルのバリアフリーのための様々な工夫をされ、その後も、脱衣場所がわかりやすくなる配慮（写真）、ヘルプカードの活用等、本人目線での工夫を、自発的に次々と編み出して下さり頼もしい味方の存在に。

【専門職、行政】銭湯でいっしょにやれた経験が、地域で大切な場がどこか、本人視点で見直し、地域にある様々なお店や場とのつながりが広がった。

【情報の流れや協働】銭湯や専門職から、日常の中でとらえた本人の声や気づき、アイデアが役所にいる推進員にどんどん届くようになり、「本人がよりよく暮らすためにちょっと一緒に協働する場面が日常の一コマになっている。



銭湯側が本人視点で、本人が一人でわかる・できる工夫を次々と



スーパー銭湯動画

### B. 高校球児との活動を通じて

【本人たち】若い球児と出会えたことが、日々の中でのほりあいやまたの出会いを待ち望む。前向きに暮らす原動力になっている様子がうかがえる。

【家族】当日のエピソードや写真、動画を職員が家族にも伝え、地域に出かけて本人が活躍することに、賛同や応援をしてくれる家族が増えている。

【地域の人】学校の先生たちが感動され、本人と生徒との交流を継続的に企画・応援して下さっている。

【専門職、行政】生徒が特別新たなことをしなくても、生徒の日常に本人が出向く機会を作ることが重要と気づき、生徒以外でも地域の様々な人たちがふつうに暮らしている中に本人と出向くことが増えている

【情報の流れや協働】学校の方から、学校の動きの情報や提案が行政推進員に入るようになった。

## 6 今後の展望

- ◆施策担当者が異動しても、行政担当者と推進員+認知症コーディネーターが本人といっしょに活動しているチームワークを今後も大切に、そのチームに年々新たな人たちも加わり、継続的に発展していく流れをつくっていきたい。
- ◆日々の中で本人と様々な人たちとの（小さな）共生が生まれており、そのリアルな姿や声を、本人の傍らで活動する推進員が写真や動画も含めて記録し続け、市内全体の多世代・多様な人たちに伝えて新しい認知症観を楽しく広げ、本人が地域の中で自分らしく生きる地域共生を自然体で広げていきたい。
- ◆本人たちの生き生きした姿の声が、介護や福祉、医療の専門職の意識にも大きなインパクトをもたらしている。本人とともに専門職の意識・支援力の向上を図り、専門職も地域の一員として、本人の超早期から最期まで本人が地域で自分らしく暮らし続けるための地域継続的支援チームを育てていきたい。
- ◆本人たちの暮らしには、役所内のすべての部署の関心と関わりが重要であり、推進員も参加して開催している庁内連携会議をベースに、気軽に話し合える関係を育てて、それぞれの部門の（若手）職員と協働しながら、日々の暮らしと地域の中での総活躍のまちづくりを本人とともに進めていきたい。

### この活動を通して見えてきたポイント

全ての起点は、本人の声

日常業務の中で本人の声を聴き、共有しながら本人の望みの実現を、一緒にチャレンジ

推進員が行政と地域のケア現場におり、ビジョンとミッションをいつも共有

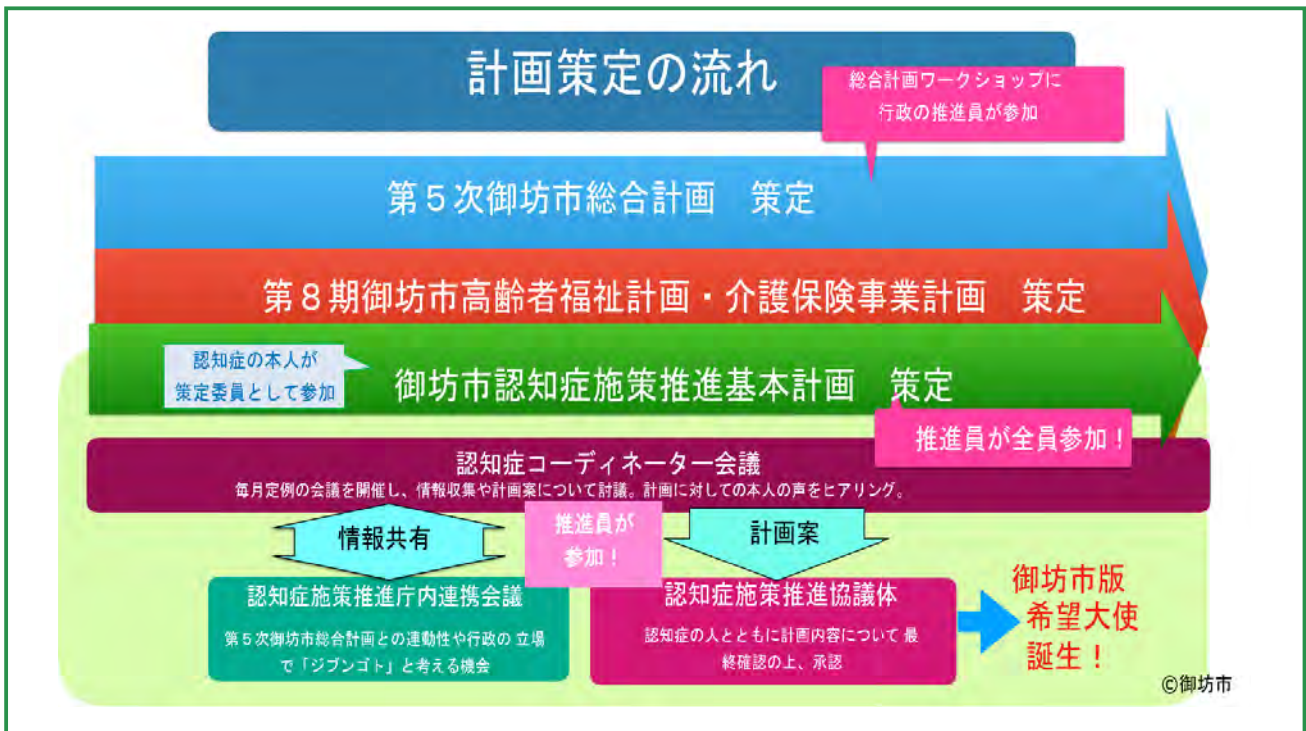
本人が持つ地域のつながりをフルに活かし、地域の多様な人たちが自ら活躍する機会を

認知症コーディネーターを育て、推進役として行政・推進員と一体となって楽しく活動

計画を道標に、息長く着実に前進を続ける

●推進員活動に関する写真・資料など

<御坊市の認知症施策推進体制の全体像の中での、推進員の位置づけ・機能>



- \* 第5次御坊市総合計画とシームレスな連携で10年後を見据えた長期的な視点で推進基本計画を策定。
- \* 計画の策定・推進・見直しには、本人とともに、推進員が参加。
- \* 条例・計画が推進員の日常の活動の指針となっており、推進員が日々、施策を直接・間接的に推進中！

**先入観の払拭のために市の「希望大使」誕生！**

認知症と診断された後も希望を持ち自分らしく活躍している姿を発信し、認知症の人やこれから認知症になるかもしれない人たちに「希望のリレー」を繋げられるよう、山際裕三さん（82歳）と塩路京さん（95歳、グループホーム入居中）が、御坊市版認知症希望大使「あがらの総活躍希望大使」任命される。お二人には、日頃から推進員が継続的に関わり、推進員が大使任命を後押し。本人たちが日常の中で生き生き活躍する姿や声を推進員が地域でともに発信。

※「あがら」は方言で、自分たちという意味

**一人の人「西山さん」が地域で暮らし続けられるように。亡くなくても自宅畑がみんなの「ドリーム農園」に**

認知症になってから地域の人たちと会うこともなくなっていた西山さんが、再び地域の人たちとともに楽しい一時を過ごせるように継続的に関わる。

西山さんが亡くなられた後も奥さまと推進員がつきあいを続ける。奥さまから本人が大事にしていた畑を使ってほしいと。今では、高齢者から子供までみんなの出会いと活躍の場に。

ドリーム農園へ来てくださるようになったご近所の方が「子ども食堂」と繋がりがあり「野菜を寄贈しよう」とフードバンクへ提供することに！

本人がうれしい！  
地域みんなもうれしい！  
推進員もうれしい！  
推進員が異動になっても、推進役として、それぞれのペースで楽しくいっしょに活動が続いている。

本人を含め地域の仲間と、一緒に過ごし、一緒に悩み、一緒に考え、一緒に行動  
~ちょっとした工夫で、楽しい活動を、みんなで~

静岡県・富士宮市 福祉企画課 地域包括ケア推進係 杉浦綾乃（専任・任用、社会福祉士）

キーワード：本人の声、発信支援、相談、本人と計画づくり、社会参加、住民同士の創造力、専門職の力、活動から共生へ

1万人未満

1~5万人未満

5~10万人未満

10~20万人未満

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

●推進員活動情報ダイジェスト

<自治体情報> 2022年4月1日時点  
◇人 □ 129,654人 ◇高齢化率 30.2%  
◇圏域数 12 ◇包括数 6（直営1、委託5）

<認知症施策のビジョン・方針等>  
いつでも本人が主人公。自由に発言できる場や機会があります。住民が本人の声を聞きともに過ごす時間を大切に。活動が途切れないよう住民と行政の意見交換の場を身近なところに。個別支援充実。

- <推進員の主な活動>
1. 本人とともにこれからの暮らしを考える
  2. 認知症理解の輪を広げる
  3. 本人が（に）必要とする機関の架け橋

<今回報告する活動>  
声を聴く/届く、拾う → 相談する → 計画・作成する → つなぐ/つながる → 実施 → 見える化・展開 → 見直しという日常的な基本的活動の流れの1例を報告。

<推進員の配置状況> 2012年度より配置  
◇8人：専任1（企画課）  
兼任7（直営包括1、委託包括5、健康推進課1）

<行政と推進員との関係づくり・協働>

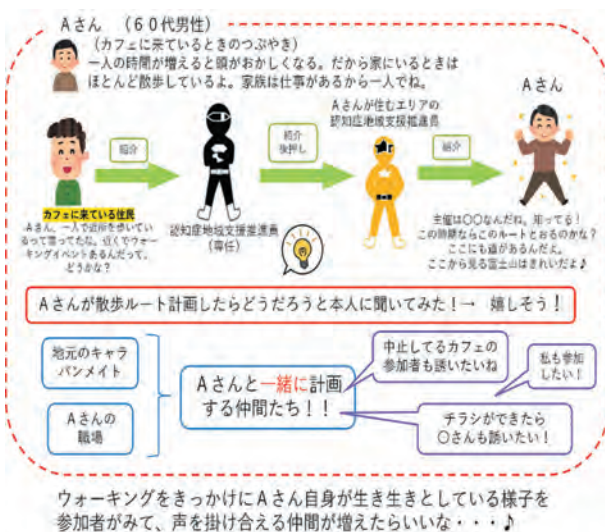
- ・市の担当者や推進員が交代しても、左記のビジョンや方針を大切に引き継ぎ、いっしょにコツコツと育てている。
- ・行政の推進員、委託包括にいるエリア推進員が日常的にやりとり。本人・現場の声が役所に届く流れが定着。
- ・専任の推進員が現場に出向きエリア推進員を後方支援。

<活動のプロセス>  
Aさん（60代男性）の「一人の時間が増えると頭がおかしくなる」という声をキャッチしたカフェの住民が推進員につなぐ。エリア推進員につなぐ。Aさんが散歩ルートを考え、一緒に計画した仲間が集まり実行。活動を見える化・発信。他の事業にも活かす。

<活動を通じた変化・成果>  
Aさんと一緒に計画・実行する仲間が広がり、本人、家族、地域の人、専門職がともに自発的に活動を継続。他のエリアにも波及。

●推進員活動のシーン

本人の声を伝え合い、本人が企画しやってみるのをみんなで応援



カフェでの本人のひと言を伝え合う中で、一人ひとりのつながり・アイデアの連鎖が起こって本人の企画が実現、その先へ

# 本人を含め地域の仲間と、一緒に過ごし、一緒に悩み、一緒に考え、一緒に行動 ～ちょっとの工夫で、楽しい活動を、みんなで～

## 1 この活動の背景・きっかけ

- カフェでの本人Aさんのつぶやき「一人の時間が増えると頭がおかしくなる。だから家にいるときはほとんど散歩しているよ。家族は仕事があるから一人でね。」
- この声を聞いたカフェに来ていた地域のBさんが、「Aさん、一人で近所を歩いているって言ってたな。近くでウォーキングイベントあるんだって。これどうかな？」と、Aさんに渡してほしいとチラシを届けてくれた。

## 2 この活動のプロセス:最初の一步、その後の展開

- ・ Bさんからチラシを受け取った推進員（専任）は、Aさんが暮らすエリア推進員Cに、会話のきっかけになるといいたいと思い、チラシを託した。
- ・ エリア推進員Cが、Bさんの情報ウォーキングイベントについて調べて、Aさんに紹介。
- ・ Aさんは、とても喜ぶ。主催を知っており、この時期ならどんなコースを通るのかと想像してみたり、そこからの美しい風景などについて、楽しそうに話してくれた。
- ・ その様子を見た推進員CがAさんに、「ふだんの中で、楽しみにいける散歩ルートを、Aさんが自分で計画するのはどう？」とAさんに聞いてたら、うれしそうだったので、推進員Cから何とか実現できないかと、他の推進員に相談。
- ・ Aさんは、顔なじみの地元の仲間（住民、キャラバンメイト）やAさんの職場の同僚にも声かけし、散歩ルートの計画をAさん本人と仲間たちが一緒に立てることになる。

仲間たちから、「中止しているカフェの参加者も誘いたいね」、チラシができれば〇〇さんも誘いたい！」と次々アイデアがでる。  
その後、チラシを見た人たちから「私も参加したい！」と、一人また一人と口コミで参加希望者が増える。

## 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ・ 周りで決めたり、進めてしまわずに、些細なことでも、「Aさん“と”考えて、Aさん“と”決めることを、みんなが大事にしていけるように、推進員がそのスタンスを、自然体でとり続けた。
- ・ Aさんの「自分はルートは考えれるけど、日程とかは誰かに考えてほしい」という思いを、推進員や仲間が共有。誰もが負担なく実施できるように、役割分担を一緒に考えた。
- ・ 専任の推進員がやってしまったら、先回りしないで、エリア推進員がAさんと一番関わりながら、一緒に考えたり、プロセスを一緒に進んでいけるようにした。
- ・ 推進員がつながりのある人もつなげつつ、肝心なのはAさん自身が培ってきているつながり。Aさん自身が「一緒に計画をたてたい」と思った人たちを具体的に知り、Aさんとその人たちが中心になって楽しく計画を練ったり進めていけるよう、話し合いの機会を作り、チラシづくりや周知などバックアップに徹した。



## 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- ・ Aさんと仲間が主になって、できる範囲で進めていったので、壁や苦慮するようなことは特になく進んだ。ルート上にあるお寺や公民館を一時休憩所として貸してもらいたいと、Aさんや住民とともに声かけに行き、協力をうることができた。

## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

**【本人】** みんなが喜んでくれたから、またやりたい！ 散歩中の楽しみができた（次の計画を考える）！

みんなが自分にありがとうと言ってくれるけどこっちがありがとうだよ。

**【家族】** 本人がいきいきしてる！積極的に外にできるようになった！

**【地域の人】** なじみの仲間：Aさんに久しぶりに会えた。これからも変わらないつきあいをしていこうよ！おたがいさまだから！

**【専門職】** ケアマネ：Aさんが地域の人とどういつきあいがあるのかを知ることができた。Aさんとの話題が増えた！

**【行政・推進員】** 今回の本人が計画した散歩を大切に活かして、終了後に次につなげる仕掛けを。まず、やってみたことを大切に、活動を見える化する！



年3~4回発行のキャラバンメイト通信に最近のトピックとして紹介・PR



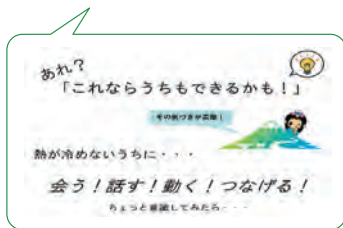
キャラバンメイトフォローアップ研修 & 交流会でレポート



当日散歩に参加していた地元の人が知りあいの地元新聞の記者に情報を入れていた。記事に！

様々な市民活動に共感して下さった記者さんからの声掛けで、「認知症になっても自分らしく生きる」という連載が始まることに。

**【情報の流れや協働】** 活動を知ったカフェ運営者（コロナ禍で活動を休止中）から→屋内でのカフェはできないけど、同じように戸外でやってみよう！



本人の小さなつづきを地域の人やエリア推進員がキャッチ  
 → 本人の仲間やケア関係者に共有  
 → 本人の望みをいっしょにかなえながら仲間が広がる楽しい活動が、市内のあちこちで生まれる。  
 \* 推進員はそのつなぎ役、後押し



## 6 今後の展望

☆認知症になってからも、「自分は自分」として、ともに暮らせるまち富士宮」を日々の中で

◆認知症を特別なことではなく、自然なこととして理解できる流れを、より広げ、深めていく

\* 本人の声を地域に届ける → 一緒に時間を過ごす → 住民が本人の思いを理解する。子供から大人まで。

◆認知症を本人、医療、介護だけで完結しない

\* ともに集える場、活動できる場を増やしていく（カフェ、就労、本人ボランティア、ソフトボール、旅行等）

◆本人、家族と地域をつなぐ「橋渡し役」の存在を増やしていく：様々な立場の人が、自分自身も楽しみながら

### この活動を通して見えてきたポイント

本人の声が、すべての活動の原点。本人たちは思いや望みをつづやいている。

無理・できない？ → 地域の楽しい動きを伝えて「できるかも」を増やす。一緒に悩み一緒に動く。

個の声をきっかけに、本人、家族、住民、企業、専門職がつながり、創造力・解決力が伸びていく。

元気な頃から、その先々まで、様々な人がつながりあって、ずっと地域の中で、いっしょに、続ける。

本人が「やりたいことをやる計画」を、本人主体でつくってみる応援を。本人が生き生き。仲間が現れ、つながり、つなげて、一緒に楽しく実現。

各エリアの推進員（役）の活動を後押ししたり、関係者や行政等に橋渡しする推進員（役）がいると、推進員活動・施策全体が活発に展開する。

年々一歩一歩、本人の声を聴きながら、「ともに生きる」を一緒に実現する仲間が広がっています

1) 本人が気軽に言える——みんなが声を気軽に聞く



コロナ禍……会いたい！集まろう！  
戸外で青空カフェを



本人の望みを、一緒に  
やりたい人が無理なく、楽しく



いつでもゆめを 木工房  
働きたい本人とともに



本人が講座、研修、イベント  
いつでもともに、本人発信

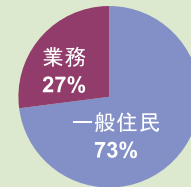
2) 住民同士がつながって自ら活動：カフェや講座を住民同士で



住民主体のカフェが市内各地で次々誕生  
行政や推進員は、その応援・相談役



学校での講座も住民のメイトさんが  
学校へのアプローチから実際まで



キャラバンメイト研修受講者（R3年度）37名  
7割強が住民さん！3割は業務（専門職）

3) 認知症疾患医療センターはじめ、認知症サポート医、医療・福祉・介護の専門職がともに



年2回の近況報告会



会話の時間を大切にしています

【参加メンバー】

- ・認知症サポート医
- ・テーマに関心を持った病院専門職
- ・圏域認知症疾患医療センター相談員
- ・地域包括支援センター職員
- ・富士宮警察署交通課
- ・グループホーム職員
- ・行政（福祉担当課・交通担当課）
- ・生活支援体制整備 二層SC

推進員：それぞれの立場の強みを活かして。いつでも、どこでも一人の声からつながり、ともに地域で

それぞれの立場の強みを生かす

各地域包括支援センターの認知症地域支援推進員

- 【強み】 個の声を聴ける環境が多い
- \* 個別相談から
  - \* 他の包括職員から
  - \* 居宅介護支援専門員から
  - \* 地域の集まりから



健康増進課の認知症地域支援推進員

- 【強み】 予約から相談までのつながり  
予約を知りたい人は多い

専属の認知症地域支援推進員

- 【強み】 カフェに参加しやすい  
動きやすい  
情報が入りやすい

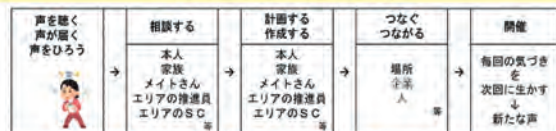


行政：直営包括の認知症地域支援推進員

- 【強み】 個の声を聴ける環境が多い  
認知症施策に生かしやすい  
地域住民に知ってほしいの発信  
地域住民が知りたいの発信



個がつながり、やがて地域へ



個の声をきっかけに様々な立場の人がつながっていく

本人・家族・住民・商店街・企業  
医療や福祉の専門職  
地域包括支援センター  
生活支援コーディネーター などなど

共に考え、悩み、動く  
↓  
関わった方々の意識が変わる  
↓  
地域に広がっていく  
(点から線、線から面へ)

認知症カフェなどは人とつ  
ながるきっかけの場所。  
それぞれの活動が始まるこ  
とがゴールではない

推進員＝運営する人  
ではないと考えています。  
推進員が相談できる相手は？

無理・できない？  
積極的に声をかけていく！

やってくうちに、これこそがチームオレンジでは？生活支援体制整備事業とやっていると似たような、  
などと気付くことができました。担当は違えど、それぞれが独立した事業ではないため風通しのよい関係性で



## 認知症の人とともに築く地域

～一人との出会いや声を大切に、地域に溶け込み、暮らしやすいまちを一緒につくる～

静岡県・藤枝市 健康福祉部 地域包括ケア推進課 横山麻衣（専任 作業療法士）

キーワード：本人の声、ピアサポート、本人ミーティング、本人発信支援、社会参加支援、就労支援、ヘルプカード、連動、共生

1万人未満

1～5万人未満

5～10万人未満

10～20万人未満

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

### ●推進員活動情報ダイジェスト

#### <自治体情報>

◇人 □ 142,169人 ◇高齢化率 30.9%  
◇圏域数 9 ◇包括数 7（委託7）

#### <認知症施策のビジョン・方針等>

認知症とともに誰もが自分らしく暮らし続けられる取組の充実 ①認知症の人とともに築く地域づくり、②認知症の人を見守り家族を支える体制づくり、③早期に医療や社会資源に繋がる体制の充実

#### <推進員の主な活動> 上記①～③の施策を具体化

①ぶらり本人ミーティング、若い本人と家族の交流会、発信支援、市の会議も含め社会参加支援  
②ヘルプカード、見守りネットワーク事業 ほか  
③本人の声を丁寧に聞きながら伴走型個別支援

#### <今回報告する活動>

出会った本人とともに「地域でよりよく生きる」を一緒に進めていく中で、新たな取組みの創出も含めて①～③をつなぎながら自然と発展している活動

#### <推進員の配置状況> 2012年度より配置

◇8人：専任1（推進課）、兼任7（委託包括7）

#### <行政と推進員との関係づくり・協働>

- ・専任と兼任の推進員が日頃から個別ケースについて本人視点で一緒に考える姿勢を大切にしている。
- ・施策推進会議や専門部会に推進委員が参加し、課題や計画について検討。
- ・専任が兼任の推進員の声や課題、提案を行政につなぐ。

#### <活動のプロセス>

Aさん（50代女性）との出会いから、他市の本人の力も借りて本人同士で暮らしや地域を一緒に考える本人ミーティングを開催。そこを足場に本人たちが出会い、社会参加や市民・子供向けの講座での本人発信、藤枝市版本人ガイドの作成、ケアパスの改定、就労、ヘルプカード活用など、市の認知症施策のベースになる取組を本人とともに続けてきている。

#### <活動を通じた変化・成果>

本人たちの声や生き生き活動する姿に触れて、ごく自然に「ともに」過ごし支えあう人たちが多世代多分野に広がってきている。

### ●推進員活動のシーン

本人同士が出会い、じっくり話し合い、自分と元気を取り戻し、発信・地域活動していけるための拠所をつくる



専門職の相談やサービスにつないでも解決できない悩みと本人は格闘。他市の本人の先輩の協力を得てじっくりと話しあう機会をつくる。



本人同士の出会いから定期的な本人ミーティングに。50～80代まで多様な年代の人たちが交流し体験や工夫を共有。



本人たちの発案で、戸外での活動が増えていく。四季折々、地域の中へ。自然に声が出る。ぶらり本人ミーティングに。



市民みんなのなじみの公園で、本人同士がひなたぼっこ。素の自分で行われる仲間たちがいる。

本人たちが声をだしながら、地域の人たちと出会い、楽しみ、はたらき、「ともに生きる」生活スタイルを拡張中



地元の畑仕事の居場所で混ざって、気持ちのいい汗を流す。



畑でヨガの先生と出会う。一緒に森歩きの会をスタート。



市職員、市民、子どもたちに思いを語る。



あきらめないで、働く場を開拓。



ヘルプカードを活用し暮らしやすいまちに。

## 認知症の人とともに築く地域

～一人との出会いや声を大切に、地域に溶け込み、暮らしやすいまちを一緒につくる～

### 1 この活動の背景・きっかけ



若年性認知症の女性Aさんとの出会い（包括に相談。じっくり話を聴いてみた）。

- 外に出たい気持ちはあるけど、変な恰好してないか心配で、準備するのが嫌になっちゃう。
- あれ？すぐわすれちゃう。私ね、言葉が出なくて……。知らない人と会いたくない。自信がない。
- （好きなこととか話していると）畑仕事、やってみたい気持ちがある。教えてください。

### 2 この活動のプロセス：最初の一步、その後の展開

- ・ Aさんは、自分の中に起きている変化について深く悩んでおり、相談を続けたり、医療や介護サービスにつなぐだけでは解決できそうにない。
- ・ Aさんが、少しでも悩みから脱出できるように、県内他市で前向きに活動している本人Mさんに相談。Mさんの力を借りて、Aさんと日頃の思いをじっくり話してみることに。
- ・ 日々の思いや、やりたいことをやるために必要な工夫、自分でお金をもてるような金銭管理、診断された時のことを、本人同士でじっくり話しあう。「私は誰に相談していいか分からなかった。友達にも言えなかった。他にも（同じ気持ちの人が）いると思う。」というAさんのひと言から、本人同士が出会える環境の大切さを実感。
- ・ 本人の声を聴き、協力してくれる居場所の存在もあり、市内で本人同士が会えて話しあえる場をとにかく少人数からでもはじめてみることになる。本人ミーティングを毎月1回開き続けていく中で、包括やチラシをみてなど、つながってくる本人たちが一人ずつ増える。
- ・ 居場所の人たちもAさんの「畑仕事をしてみたい」という思いを聴き一緒に挑戦することになった。



Aさんは、畑仕事を他の人に教えてもらいながら、いっしょに動いて汗を流し、気持ちよさそう。自然と雑談が始まり、Aさんは、そこにいたヨガの先生と自然とおしゃべり。「森歩きが好き」という共通のやりたいがある！やりたいことが重なり合って、森歩きの会  樹木クラブ  が誕生！



外にでると思いがけない出会いと次の一歩が生まれた

### 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ・ 最初「話せない」と言っていた本人、家族らに「話せないから」と言われていた人も、決めつけしないで、とにかくゆったりと、声が出るのを待つようにしている。
- ・ 本人同士が会おうと専門職が関わる以上に、本人が声や力を出し始める。サービスにつなぐだけでなく、出会った本人を本人仲間につないでいった。
- ・ 本人たちの声ややりたいことを、その場にいた人たちだけのものにせず、本人たち自身が外に向けて、どんどん発信できる機会をつくった。
- ・ 本人ミーティングはひとつのきっかけ。そこで完結させずに、そこで本人が語った「やりたいこと」をかなえるために、必要な人や場を、本人と一緒に見つけたら、出向いていき、諦めずに一緒に動くことを続けている（写真）。



働きたい

諦めずに  
就労に挑戦！  
ハローワークや職業  
センターでの相談、  
体験や見学を重ね、  
就労継続支援事業所  
で働くことを決めた。

### 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- ・ ちょうどコロナ禍が続き、集まりや活動の機会が制限された。事業や集まり等を中止・休止することは、外出や交流、チャンスが減って、本人たちには大きな痛手に。
- ・ 事業モードで考えていても進まず、本人たちと、とにかく話しあってみた。「特別なことをしなくても、三密を避けて、会ったり、一緒に過ごせる！コロナ禍だからこそ、会おう！！」
- ・ 本人たちと工夫をしながら、コロナ禍でも「ぶらり本人ミーティング」を続けることができた。仲間の散歩コースをみんなで歩いてみる等、逆に、戸外での活動の機会や場が広がった。



## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】

- ・ 家族や友人も含めてそれまで誰も言えなかった悩みや疑問を、「あるある」とわかりあいながら率直に話せる仲間ができたことで、最初の頃に比べて、みんな明るくなった。
- ・ 病気や症状ばかりをみずに、自分のできることややりたいことをみつけて、やってみたい、あきらめないで挑戦してみよう、と前向きに暮らせるようになっていく。
- その仲間（先輩）に会えることで、他の本人たちも、前向きになれている。
- ・ 外出をためらっていた人も、仲間たちと外出を楽しむ経験を重ねる中で、普段も閉じこもらずに地域にまた出かけるようになっていく。
- ・ 外出先でやりたいことが同じ市民と出会って、楽しみやほりあい、活動範囲が広がっている。
- ・ 「自分たちの体験や思い、工夫を、次に続く人たちや地域に伝えたい」、「知ってほしい」と本人たちが、講座や研修等で話しをしたり、地元のフリーペーパー等の取材に応じて語るようになった（右）。認知症になったからこそできる自分の役割として、自信にもなっている。
- ・ 「自分から伝えないとわかってもらえない」と本人がヘルプカードを自ら作って、日常使いするようになった。使いながら、認知症があっても自分の望みや必要なことを自ら伝えながら、一人で外出を楽しめる実際を地域の人や様々な企業等に伝える啓発役を務めてくれる。



地元誌で発信

**【家族】** 本人が前向きに元気になっていることを喜び、本人の見方や関わり方を変えて、家族自身も前向きに。

- ・ 本人同士、あるいは本人と地域の人たちで外出する時間が増え、家族なりの時間を持てるようになっていく。

**【地域の人】** まちの中で本人たちと「ふつう」につきあい、一緒に楽しむ場面が少しずつ増えてきている。

- ・ 講座や広報で、自分らしく暮らしている本人の姿や声に触れる機会が増え、発想を変える必要性や自分事として前向きに受け止める人が増えてきている。
- ・ まちの中で、ヘルプカードを使って本人が発信することで、本人が自分の力で暮らしていくことを具体的に応援しようというお店や窓口の人が、少しずつ増えはじめていく。

**【専門職・行政】** 本人と出会うまでは、「事業をどうするか」という視点で考えていた。本人との出会いから、認知症の人との関係性や自分自身の認知症観を見つめなおすきっかけになった。

- ・ ケアマネ等が、以前に比べ本人の声を聴き、アセスメントのあり方を見直すようになっていく。
- ・ 社会参加について本人とともに話しあったり、その支援に取組むケア関係者が増えてきた。
- ・ 令和3年度、認知症の本人を中心に藤枝市版認知症本人ガイドを作成。本人、家族、市民が認知症になってからも自分らしく暮らす視点での啓発を少しずつ進めるようになった。ケアパスの改定も本人とともに取組み、本人の声から必要な流れを築いている。
- ・ 令和4年度から、市の認知症施策推進会議に、本人が委員として参画する体制に変わった。



専門職、行政職が、本人の声を聴くことで視点や発想が変わる！

**【情報の流れや協働】** 包括や医療機関と早い段階で出会える環境作りについて検討を進めている。一人ひとりとともに、本人の声をももにつながりあい、さまざまな立場の人が自然な形で本人の暮らしを支え、本人が地域で暮らすための地域の中でのつながりあい（チームオレンジ）が生まれている。

- ・ 行政と専任・兼任の推進員で、本人の視点や声を大切に情報共有や検討を心がけている。

## 6 今後の展望

☆いくつになっても笑顔で藤枝：認知症の人を特別視せず、市民の一人として笑顔で暮らし続けられる地域に

- ◆ 本人にとって「社会参加」は特別なことではなく、これまでもこれからも当たり前のこと。
- ◆ 本人とともに社会参加（やりたいこと・行きたいところ・必要なこと等）に挑戦できる環境作りや仲間づくりを重点的に。

### この活動を通して見えてきたポイント

本人の“ために”から、“ともに”に、みんなが発想を切りかえる。

原点は個別支援。“できる・できない”等の既存のアセスメントの視点に捉われず、ひとりとの出会い、ありのままの声を大切にしていく。

本人同士が、鎧を脱いで自分を出せる、楽で楽しい場や機会を市内外の本人たちとともにつくる。

外に出ると、思いがけない出会いやチャンスが生まれる。本人とともに社会参加の機会を増やしていく中で、推進員も行政も発想やつながりが広がる。

必要なのは支援者よりも、人としてのつながり。分野を超えた場や人たちをよく知って、本人が望みをかなえていくために、つながる、つなげる。

本人が望む社会参加を、本人とともに進めることで、地域の中で普及啓発や認知症バリアフリー、そして地域共生が自然に生まれ、広がっていく。


本人とともに取組んできたこと 本人の声から発信！挑戦！

一人の当事者がよく話していたこと


働きたい！  
とにかく仕事がない今の生活が耐えられない！

認知症の症状はひとそれぞれ。正しく理解して欲しい！

市役所職員や本人の住む地域の小学生や民生委員に、認知症の症状と生活の中での工夫や認知症とともに暮らす中での日頃の思いについて伝えた。



本人が楽しいクイズを工夫！




講座等の参加者アンケートを本人たちと一緒に、見ながら集約・振り返り。本人たちの喜びややりがい、気づき、次なるチャレンジにつながっている。

本人とともに取組んできたこと 仲間とともに発信！！

令和3年度  
あなたへ～認知症のわたしたちから伝えたいこと～

藤枝版認知症本人ガイド

あなたへ

認知症への不安を感じている方や、診断を受けた方に向けて、一足先に認知症の診断を受けた本人たちの声や、暮らしの中での工夫、これからの暮らしに役立つ情報を掲載。

「あなたへ」作成までの道のり

認知症の本人を中心に「本人ガイド作成委員会」を立ち上げ、「認知症になっても自分らしく暮らす」という視点で大切なことを、診断前からこれまでの経験を振り返りながら本人同士で話し合い、認知症の本人の視点から必要な情報や、伝えていきたいことを確認しながら作成。

本人とともに取組んできたこと ～認知症施策のベースを一緒につくる～



「希望をかなえるヘルプカード」を活用し社会参加を続けるヘルプカード作成のきっかけとプロセス

- ・コンビニのATMで悔しい思いを経験…
- ・本人ミーティングで他市の当事者と出会う機会がありヘルプカードを使っていることを知った。
- ・“あの時このカードがあれば良かったのかも”自分にとって必要なカードだ！カードを作ろう。
- ・内容は本人の声から、伝えやすさ、伝わりやすさ重視
- ・裏側には障害者手帳も入れておくことで、バス乗車時も便利に！

実際に使ってみて起こったこと

- ・買い物の場面でも役に立つ！（セルフレジ）
- ・病院受診の時にも代筆を頼みやすくなった。
- ・（カードが）あるのとないのでは違う。（カードを）見せて頼むと、「ああ、そうなんですね」とサポートしてもらえる。

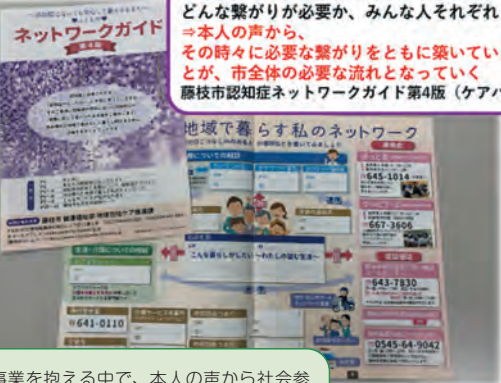
⇒自然な形で地域の中での理解が広がっていく、応援者が増える！

本人とともに取組んできたこと ～認知症施策のベースを一緒につくる～

どんな暮らしを送りたいか  
どんな繋がりが必要か、みんなそれぞれ！  
⇒本人の声から、その時々に必要な繋がりをともに築いていくことが、市全体の必要な流れとなっていく  
藤枝市認知症ネットワークガイド第4版（ケアパス）

地域で暮らす私のネットワーク




色々な事業を抱える中で、本人の声から社会参（やりたいことをともに実現していく）に焦点を当てて取組むことで、他の事業の考え方が整理されたり、一体的に考えられたり、加速していく。

ヘルプカードを使い外出しています！

ヘルプカードとは自分が望んでいること（やりたいことや避けたいことなど）を安心してスムーズにできるために、自分が使うカードです。周りの人に自分が望むことやちょっとわかってほしいこと、お願いしたいことを書いておき、必要なときにだけ見せて使います。

こんな時に使っています

- ・セルフレジ等の機械の操作をサポートしてほしい。
- ・病院の問診票や申請書等の記入時に代筆をお願いしたい。
- ・買い物の支払いの時にサポートをしてほしい。
- ・道に迷った時に、帰り道を教えてほしい。




日々の中で、“ともに”が自然に

## 「おれんじドア」を本人とともに創る ～一人でも多くの人が、希望をもってともに暮らしていけるように～

鳥取県・鳥取市 中央包括支援センター 金谷佳寿子（専任 介護福祉士）

キーワード：本人の声、共創、本人ミーティング、ピアサポート、おれんじドア、本人相談員、市版希望大使

1万人未滿

1～5万人未滿

5～10万人未滿

10～20万人未滿

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

### ●推進員活動情報ダイジェスト

#### <自治体情報> 2022年3月末時点

- ◇人口 183,260人 ◇高齢化率 30.0%
- ◇圏域数 18 ◇包括数 11  
(基幹1、委託10)

#### <認知症施策のビジョン・方針等>

- ◇認知症の本人とともに築く支えあう地域づくり
- ・本人とともに創る

#### <推進員の配置状況> 2015年度より配置

- ◇9人：専任9（行政・基幹包括1、委託包括7、社協委託1）
- \*行政の推進員は、介護事業所より出向。
- ・委託の推進員の後方支援役
- ・地域と行政のパイプ役として、委託の推進員を最低月1回訪問。本人や現場の声、課題等を集め、行政に情報提供・提案

#### <行政と推進員との関係づくり・協働>

- ・行政担当者と推進員がタッグを組んで、認知症施策を推進。
- ・そのために、担当者と推進員は、施策・事業の企画段階から頻りに話し合い、行政は推進員の意見を積極的に反映。

#### <推進員の主な活動>

- 1 医療・介護・地域支援サービスの連携を図るためのネットワークの構築・強化の取り組み
- 2 関係機関と連携した事業の企画・調整の取り組み
- 3 本人とその家族を支援する相談支援又は支援体制を構築するための取り組み
- 4 認知症に関する啓発・広報

#### <今回報告する活動>

上記2の一環として、本人のこぼれから「おれんじドアとっとり」を本人とともに立上げ、展開している活動について

#### <活動のプロセス>

- ・本人ミーティングで本人たちから、「本人と早く出会い、話したかった」、「本人にしかわからないことがある」等のことばが出た。
- ・本人と推進員と一緒に「おれんじドアを創ろう」と意見が合致。
- ・早速、市担当課に相談。本人とともに検討を重ね、一緒に開催要項を作成。工夫や運営についても、知恵を出し合う。
- ・認知症疾患医療センターをベース基地として、本人相談員（有償）が月1回「おれんじドアとっとり」を実施。その調整やバックアップ、声を行政等につなぐ等の機能を推進員が続けている。

#### <活動を通じた変化・成果>

- ・本人同士1対1でのじっくりした話し合いを通じて、本人が前向きに立ち直り生き生き変わっていく。その姿に相談員の本人も元気が湧き、出前型などに動きが発展。
- ・専門職、行政も本人の意見を聞きながら本人とともに実践していく大切さの認識が進み、市版希望大使の誕生につながった。

### ●推進員活動のシーン



#### 本人ミーティング

- ・「もっと早く仲間に会いたかった」本人たちの切実な声や意見が相次ぐ。
- ・推進員がおれんじドアの提案を試してみたら……
- ・一緒にやってみよう！！相談しながら、一緒に準備。



#### おれんじドアとっとり

- ・月1回、予約制
- ・市内の認知症疾患医療センターの場を借りて
- ・本人相談員が、ゆっくりと話をききながら話しあう。
- ・推進員は、調整やバックアップ役に徹している。



#### 移動型おれんじドア

- ・本人相談員と一緒に行動することで前向きに変わっていった本人。
- ・私もやってみよう。
- ・やりたいことを推進員と本人とで後押し。
- ・認知症カフェで出前型のおれんじドアがスタート！



#### 鳥取市版希望大使

活動をともにしている二人が市の希望大使に  
「希望をもって生活する姿や自身の経験をともに、より良い暮らしにつながる情報を多くの市民に発信することで、希望の輪が広がっていくことを期待します」 市長挨拶より

# 「おれんじドア」を本人とともに創る ～一人でも多くの方が、希望をもってともに暮らしていけるように～

## 1 この活動の背景・きっかけ

きっかけは、本人ミーティングでの本人のことば

- 認知症本人と早くに会い、話がしたかった。
- これから認知症になる人に、早い段階で良い情報を伝えたい。
- 本人にしか分からないこともある。
- 本人が希望を持てるような仕組みを作りたい

➔推進員の気づき

- 本人同士の出会いは、希望につながる意味のあるもの。
- 本人同士が早く出会い、相談にのるしくみ「おれんじドア」を鳥取市でも、本人といっしょに創ることが出来ないか？



本人ミーティングでの「本人の声」  
たくさんのメッセージや  
ともに創っていくための種が  
豊富にある！

## 2 この活動のプロセス：最初の一步、その後の展開

### 1) まず、「やってみないか」と、本人に提案。

本人は、「やってみたい!!」、と前向きに即答。

### 2) 推進員の立場を活かして、市担当課に提案、検討を重ねる。

実施主体は鳥取市・推進員の事業の一環として。

- ・推進員事業計画書の中で「おれんじドアとっとり」を明記

### 3) 開催要項（案）を本人参加で話し合い、練り上げる（詳細は、この報告の最後のページに）

★本人相談員：本人だからできる仕事 「ピアサポート」

- ・1回の相談は、1～2人程度：一人ひとりと、ゆったり、楽しく、ていねいに
- ・報償費：1回あたり 5,000円
- ・任期：1年間（更新あり）
- ・鳥取市長寿社会課が本人依頼 \*現在、2名

### 4) 工夫、具体的な運営についても、本当と検討

★もっとたくさんの人に、本人ミーティングやおれんじドアを知ってもらいたい

- ➔認知症専門医療機関に出向く
- ・医師会、精神保健福祉士会、介護支援専門員連絡会等での事業説明を行う。
- ・市報への掲載、ラジオ出演（専門職だけでなく、市民にisseurらう）

位置づけと  
継続性を確保



名刺も一緒に作成!!  
・本人が持ってうれしいモノを  
・相手がもらって、ホッとするモノを

本人といっしょに  
本人のことばで

## 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

### ◆何をするのも、本人と楽しく相談

- ・本人と経過を共有。次にやることについて、本人と意見・アイデアを出し合いながら。

### ◆本人の思いや意見等を、市側にも細かく共有：パイプ役に

### ◆話し合いメモ、議事録等をつくって、本人市と共有

- ・歩みが残るように。ずれがおきないように。

### ◆実際の流れを、本人といっしょに想像（シミュレーション!）

- ・わかってほしい人／組織、本人に情報の伝えてになってほしい人を洗い出し、出向いて丁寧に説明。

## 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

・事業化の仕方や要項の作り方をどうすればいいのか

- ➔餅は餅屋、行政担当者に何でも聞いて教えてもらった。一緒に熱心に考えて下さった。

・開催場所：病院側も初めてのことで、忙しい。どうしたら前向きに一緒に取組んでもらえるか

- ➔いきなりではなく、実際にやってみながら、少しずつ理解と協力を得ていこう、とゆったり作戦で。

## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】\*本人相談員(藤田さん)の声より

- ・出会って語り合っていく中で、本人たちが、やわらいで元気になっていく。
- ・前向きに立ち直り生き活きと変わっていく！ 自分も元気が湧いてくる！
- ・自分の住んでる町、鳥取市での活動の幅が広がってきた。
- ・鳥取市内で、同じような考え方の仲間も増えた！
- ・一方で、根深く残っている偏見、マイナスのイメージを抱えて、認知症に向き合えない人が多いことも分かった。  
→さらなる工夫を皆と一緒に考えていく必要性を感じた。

### \*本人相談員とともに活動を始めた本人(松本さん)

前向きに希望を持って暮らしながら、おれんじドアで「元気になってほしい」と活動する藤田さんを見て、「わたしも……」と次に続く本人(松本さん)ができた！

\*藤田さんと推進員：松本さんがやりたいことも後押ししてみよう！

→松本さんが、認知症カフェで、出前型のピアサポートをスタート！

\*その姿をみて、藤田さんも、ますますやる気アップ！！

→松本さんは、工夫して家事を継続するようになったり、

新しい目標、なったからこそその役割を発見！

新たな挑戦「本人の視点を伝えていこう！」→以前の職場で、認知症本人として講演



【家族】\*おれんじドアで話し合い、前向きに変わっていく本人を目のあたりにし、家族も前向きに変わっていく。認知症の病気や症状、将来不安だけでなく、本人が今どうしたいか、どうしたら本人が前向きになれるのか、家族も本人視点で考えてみることで、本人の安定、そして自分が楽になるコツ、と気づき、変わっていかれる。

【行政】認知症施策の企画・立案には、本人の意見・考えを聞くことが大切という考えが少しずつ広まってきた。

- 「認知症にならない為に何が大切か」を一生懸命啓発することより、「認知症になっても自分の大切にしたい暮らしを継続できる」ということを、本人とともに実践していくことが大切である。
- 自分らしく暮らしている本人の存在は、多くの人の希望となる。情報発信が必要である。  
→鳥取市認知症本人大使「希望大使」誕生！につながった！

【専門職・推進員】\*本人とともに動いてみることで

○こんな鳥取市になったらいいな～というイメージを具体的に共有できるようになった

→間違った方向にいきそうになっても修正できる

→具体的に何が必要か知ることができた

→具体的な小さいことから始めることができ、大きな成果ではないが、着実に一歩ずつ進めるようになってきている

○新たな仲間、理解者が増えた

・仲間として一緒に歩んでいける希望大使ができたことは本当にうれしい

・何より同じ係の人と沢山話をして、思いが伝わり、それが、他の係、同じ課の中で広がっていったことが本当にうれしい

【情報の流れや協働】他の施策の見直し・改善にもつながった！思いが広がり、他の課へも影響が出てきた

・職員から「ここの言葉に違和感がある、どうしたらよいか」と相談されるようになった

→他の係が担当している施策の要綱が変わった

・認知症高齢者等位置検索システム利用支援事業

「介護家族のため」だったのが、それだけではなく「本人のため」の施策へ変更！

さらに、2022年度から対象品目が拡充された

## 6 今後の展望

- ・継続できるように工夫を重ね、改善していくだけではなく、今ある取り組みを大切にしながらも、本人の声をもとに柔軟に変化させていく。おれんじドアとつとり「ピアサポート」→グループミーティングにも挑戦!!
- ・二人の認知症本人大使「希望大使」とともに、色々なことにチャレンジする。YouTubeに加えて、notelにも挑戦!! 本人の声をこれからも沢山届けます!
- ・アンテナを立てて、情報収集!庁内他課、企業、学校等とのマッチングで何が出来るか、一緒に検討し続ける。

### この活動を通して見えてきたポイント

本人の声の中に、本人だからこそできること、いっしょにとりくめることの種が眠っている。

「まあ、いいか……」ではなく、大切なことは、何度も話し合う。

認知症はあっても、本人たちは想像以上に豊かな力を持っている。チャレンジ精神もある(出せずにいる)。

今やっている事業を見直してみる。本人から見て、本当に必要?大切なことに力を注いでいる? 本人の声を聴いてモニタリングを。

良いと思ったこと、やりたいことは声を出してみる! 本人、周囲の人に伝えてみる!

自分の現在の所属のメリットを活かし、あきらめず地道に活動する続けていると、チャンスがひょっこり現れる。

## おれんじドアとっとり

対象者：認知症と診断を受けた本人や、「認知症かな」と気になっている人など

内容：認知症当事者によるピアカウンセリング 事前予約制

目的：●早い段階で仲間に出会い、本人にとって良い情報を知ることができる

- 認知症と共に、新たな暮らしをスタート出来る入り口となる
- 認知症地域支援推進員設置事業を活かして実施

認知症疾患医療センターと協働で行い、

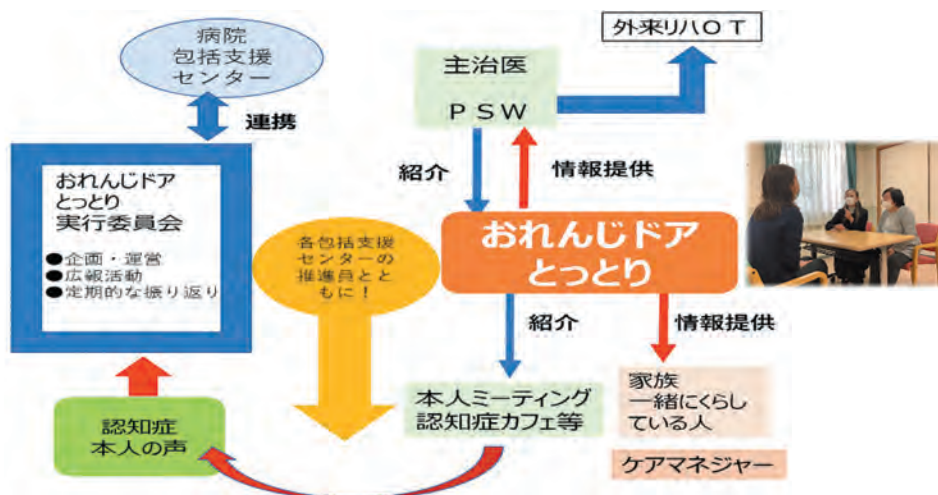
本人にとって、必要なつながりをサポートする

スタッフ：本人相談員、認知症地域支援推進員

認知症疾患医療センター、鳥取市長寿社会課

場所：認知症疾患医療センターがベース基地

⇒必要に応じて出前で



「おれんじドアとっとり」のしくみ

一人でも多くの人が、  
希望をもっとともに  
暮らしていけるように

認知症になっても  
安心して暮らし  
続けられる  
鳥取市を目指して！  
仲間とともに  
頑張っています。



2023  
鳥取市  
認知症地域支援  
推進員

「おれんじドアとっとり」や本人同士の対話の様子などについて、鳥取市のホームページをご覧ください。  
<https://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1630303311603/html/common/612c75ba005.html>



## 地域密着型サービス事業所をベースに、出会い、つながり、“ともに生きる”を広げる ～本人の声、身近な人の声から、望みをかなえる挑戦をともに～

東京都・品川区 社会福祉法人新生寿会 きのこ地域連携室 鈴木裕太（兼任 認知症介護指導者）

キーワード：地域密着型サービス、談義所、本人の声、社会参加、祭、希望大使、子ども、職員確保、異業種、共生

1万人未満

1～5万人未満

5～10万人未満

10～20万人未満

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

### ●推進員活動情報ダイジェスト

#### <自治体情報> 2022年4月1日時点

- ◇人口 404,405人 ◇高齢化率 20.2%
- ◇圏域数 20 ◇包括数 1(本庁)  
\*20のサブセンター

#### <認知症施策のビジョン・方針等>

区：ともに生きる総合的施策推進  
本人と家族の意思を大事に。本人発信支援。  
(法人) 認知症があっても最後までその人らしく、住み慣れた地域で生活し続けられるように共に歩み続ける

#### <推進員の主な活動>

地域密着型事業所をベースにした日常的な本人支援や地域とのつながりを活かして、区の推進員として活動を企画展開。特に本人の社会参加に力を入れる。

#### <今回報告する活動>

- ①本人の声、地域の人たち、子供たちの声をもとに、地域の多世代がともによりよく、楽しく暮らせるための活動を、本人が活躍しながら進めた活動。
- ②本人とともに活動し応援しようと地域の多資源で結成された「みんなの談義所しながわ」を拠点に、町の振興も含めた共生のまちづくりを進めている活動。

#### <推進員の配置状況> 2019年度より

- ◇8人(兼務 介護事業所、ケアマネ、認知症カフェ担当など)  
\*推進員の重要性・活動に期待し現場から立候補。交流会あり

#### <行政と推進員との関係づくり・協働>

- ・区と法人とは、地域密着型事業所の設立時から認知症の人の支援と地域協働のあり方について協議を重ねてきていた。
- ・推進員配置の必要性や活動について法人から区に提案し、職員が兼務で推進員となる。推進員が活動を通じて得た情報やアイデアを区に積極的に伝え、区と役割分担しながら協働。

#### <活動のプロセス>

- ①事業所の地域交流スペースで地域食堂や駄菓子屋を展開。事業所で暮らす1さんが望む書道教室を継続開催。事業所職員が子連れ出勤する仕組みをつくる。
- ②本人や仲間たちと、気軽な外出や地域の祭りの企画から実施まで実行。町のファミレスでの会など、町を舞台に活動を。

#### <活動を通じた変化・成果>

- ①本人が書道を教えていく中で安定し、自分の思いの発信役を務めるようになった(東京都希望大使)。職員の子供と本人らが支えあい。職員確保の効果も大。
- ②本人が地域に溶け込んで楽しみ活躍。家族・住民・企業・医師・専門職・行政職も地域で自然に交流し支えあいが広がる。

### ●推進員活動のシーン

地域密着型事業所をベースに、本人や地域の人々の声をもとに、地域で共に暮らしていくための活動を展開



地域交流スペースで、隣接するマンションの住民が中心になって、地域食堂を月1回開催。子供から高齢者まで参加。



食堂に通う子供たちのお菓子食べたいという声から駄菓子屋を本人と始める。子供たちと本人とのエピソードが続々。



長年やっていた書道教室をまたやりたい、という本人の望みを、交流スペースで実現。本人が大活躍し暮らしも安定。



本人も、地域の人も、そして介護職員も楽しく暮らしてほしい。子連れ出勤開始。それぞれに様々な効果が！

地域の多様な人たちの中に本人も溶け込みながら、地域でつながりともに元気になる企画～活動に挑戦中



みんなの談義所しながわ  
本人とともに地域の多様な人たちが談義し、自由で楽しい活動を展開



行きたいところに、どんどん出かけよう。きままな町歩きを、一緒に、のんびりと。



町の祭の復活の企画から準備、出店までを本人とともに。毎年恒例になり、常連のお客さんも！



デニーズ・パフェの会。月1回、美味しいパフェを食べて、仲間と喋ろう。好評で区を超えて各地に拡大中。

## 地域密着型サービス事業所をベースに、出会い、つながり、“ともに生きる”を広げる

～本人の声、身近な人の声から、望みをかなえる挑戦をともに～

### 1 この活動の背景・きっかけ

- ① **地域密着型介護事業所をベースにした活動**：日々接する本人たちから「何かやりたい」という声、そして日頃おつきあいしている隣接マンションの人たちからも、「何かできることがあったらやりたい」という声がかかれた。
- ② **「みんなの談義所しながわ（以下、談義所とする）」を拠点にした活動**：診断後の空白の期間をなんとかしよう！と本人とともに活動する自主組織として2019年に多様な立場の人たちが声かけあって結成。月に1回、ゆる～く集まり、メンバーが言葉と想いを交わしながら、「誰もが暮らしやすい街を主体的に考えてみんなで創る」を談義し実行していく。



認知症本人・家族、  
医療・介護・福祉  
の専門職、出版、  
報道関係者、  
カレー屋さんなど

### 2 この活動のプロセス：最初の一步、その後の展開

#### ① 身近な人の声から、地域食堂、駄菓子屋、書道教室、子連れ出勤へと、自然につながる

- ・一緒に楽しくやれて、地域に役立つことがないか、本人、職員、マンションの人たちで話しあっているうちに「地域食堂をやってみよう！」ということになる。事業所の地域交流スペースで、マンションの人たちが中心になって、本人たちも混ざりながら、月1回の食堂がスタート。地域の子供からお年寄りまでが集り、一緒に美味しく食べながら、自然と交流。
- ・子供たちから、食後にお菓子が食べたいという声。「駄菓子に行けば～」と声がかかるが、子供たちは「知らない」と。地域にないことがわかる。職員たちが、事業所を利用する本人たちと駄菓子屋について話し合い、毎日開いている交流スペースで駄菓子屋をオープン。
- ・グループホームで暮らす1さんが夜間も含めて落ち着かない。やりたいことを何うと「長年やってた書道教室」と。近所の子供や大人で習いたい！という人たちがいて1さんが書道を教えることになる。
- ・事業所への子供たちが出入りが増える中、職員の出産・子育て中の勤務の難しさが話題に。「職員さんが苦勞したり、辞めないで働き続けられるように」という声が本人や家族、地域の人達からもあがり、子連れ出勤を試しはじめてみることになる。



#### ② 本人がやりたいことを楽しく話しながら、町歩き、遠出、町の祭の復活、ファミレスでの集いなどに展開

- ・できることから、まずは本人が行きたいところへ、行ける人が一緒に行ってみる機会をつくる。次第に遠出も。
- ・「40年前にはあった祭が復活するといいいね」という話から、本人も交えて地域の人たちと企画を練る。他地で始まったファーム・エイド（農山漁村の産物販売応援+フォーラム+体験交流）をやってみよう！ということになり、地域の人、企業、行政とも協力して開催。
- ・「町に出かけるのは楽しい」という声から、ファミレスでの集いを開いてみることになる。



パフェを食べに行きたい！という声。  
行きたい人が次々現れる。

### 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ・事業所と地域とのつながりや、専門職同士のつながりはあるが、行政、病院、地域の多様な専門職が、本人や地域の人たちと一緒にあって、暮らしやすい地域をつくっていくことが必要。「**認知症に特化せず**、地域に存在する多様な職種の人たちが、**職域を超えて**地域でつながり、**ともに楽しみながらつながりづくり**を広げていけたらいいなと考えた。出向いてつながり、人を通じてつながり、つながりが持てたら、何度も本音で語った。
- ・地域の活動が、いつのまにか本人を置いてきぼりにして進んでしまわないよう、暮らしの中での本人の声や望んでいることを、地域にどんどん伝え、本人が地域とつながり、活躍できるチャンスをつくらせた。

### 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- ・本人がよりよく暮らしていくためには、行政や医療・介護保険サービスだけ、地域だけでは解決できない課題が多く、それぞれの領域内での発想や既存のやり方を変えてつながる機会やきっかけを作っていたが、「変わること・つながること」が難しい人も少なくない。また、行政の制度と本人・家族のはざまに立ち、悩んだり苦しんだりすることも多々あった。同じような壁を感じる人たちと地域で多く出会った。
- ・だからこそ、推進員が必要！と、壁があるたびに**推進員の存在価値**を実感し、声をあげ続けた。声をあげ続けていたら、賛同者や協力者と出会え、その人たちとのつながりや結集力が前へ進む力になっている。

## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】

- ・地域の様々な人たちと出会い・つながり、一緒に楽しんだり活動する機会が増えたことで、**笑顔や言葉が増え、本人持ち前の個性や力を発揮**する人が増えている。
- ・本人たちがあきらめていたところに、一緒に出かけたり活動に参加することで、行きたいところややりたいことなどの**希望を、何気なく口に**する人が増えた。
- ・問題といわれる症状があるとされていた人も、一緒に活動していく中で、いつの間にか症状や問題がなくなり、地域の人や子供たちを**支えてくれる存在**に変わっている。
- ・本人が、自分の体験や思いを、地域の人たちに語ってくれるようになり、その体験を重ねながら、人前でもいつものまま話すことが役立つことを知り、都の希望大使も引き受けて、**本人発信役**として活躍中。
- ・まだ相談や医療・介護サービスに繋がっていなかった人が、地域で楽しそうに暮らしている本人の姿に触れたり、地域食堂や地域の新たな祭り等を通じて、推進員や専門職に出会って、相談や受診、地域の集い場等に**早期につながる流れ**ができてきた。



山に登ろう！

### 【家族】

- ・本人が介護保険サービスの枠の中だけでなく、地域とのつながりの中で元気になっていく様子を見て、地域の中で暮らすことの理解や応援をしてくれるようになった。
- ・**家族自身が地域に参加**することで、元気になり、つながりが増えて活発になっている。
- ・家族は、事業所に地域の子供が出入りすることで本人の生き生きさが格段に違い、とても喜んでくれている。また、介護と子育ての大変さに共通点が多く、職員の子連れ出勤には前向きに理解・賛同してくれている。(事業所のサービス利用開始時に、趣旨をよく説明し同意の上で利用開始している。)
- ・**コロナ禍でも**、子連れ出勤をすることに、家族から「人手が減らずに利用ができるので助かった」という声が多く、みんなで感染対策しながら、子連れ出勤を継続中。



再び、書道の先生として

### 【地域の人】

- ・隣接するマンションや近所の人たち、子供たちが、事業所の交流スペースや祭など地域活動に、それぞれのペースで無理なく参加し、**楽しみながらつながり**を広げている。
- ・本人たちと日常的に交流し、関わりや必要な配慮を**自然体で身に着けている**。
- ・本人たちの様々な話から学んだり、特技（習字や子育て、長年磨いてきたスキル）を本人から伝授してもらって役立つ、助かるという声がかかれ好評。
- ・地域の企業（薬局、ファミレス、宅配業者等）と本人たちとの自然な交流が生まれ、他店舗でも活かされるようになってきている。



子育ての大ベテラン！

### 【専門職・行政】

- ・所属や専門の**枠を超えてつながり**あい、まちづくりをいっしょにやっという専門職の輪が年々広がっている。本人の声や力の大切さを実感し、ふだんの仕事の中でも、本人の声を聴き、**本人とともに**、を実践する人たちが増えている。
- ・子連れ出勤は本人、職員、運営者皆にメリット大。若者の**就職希望増加**、辞めず就労継続。
- ・行政の人たちが、本人の声を聞く機会を定期的に設けるようになった
- ・本人の声から、**区の係名が変わった！** 認知症推進係 ➔ 認知症サポート係



地域の祭として  
ファーム・エイドが、  
まちに定着！

### 【情報の流れや協働】

- ・行政の方から情報や依頼等が以前より細かに入ようになった。
- ・行政の普及・啓発の事業などを、役割分担しながら協働して行う機会が増えた。
- ・行政が推進員の必要性や**自主的に活動する人材の配置**の重要性を捉えて、配置数の増員増員や推進員の交流の場を設置するようになった。

医師が、本人を地域食堂につないでくれるようになった。  
医師が、談義所や祭に参加。本人のふだんの声を大切に、暮らしをともに支える

## 6 今後の展望

☆その人らしく最期まで住み続けられる地域になるよう、本人の望みを一緒に声にして、地域や行政に届ける

- ◆認知症の有り無しに関わらず、一緒に楽しく地域で暮らせるために立場や職種を超えた連携の拡充を。
- ◆本人と日々関わり、本人の声と力に気づける**介護職のツヨミ**を活かしながら、本人と地域が自然と溶け込みあえるような地域をつくる推進員活動を、楽しく続けていきたい。

### この活動を通して見えてきたポイント

自治体の介護事業所にいる認知症ケアのエキスパートが推進員となり、地域の仲間とともに活動に取組めると、個別支援と地域づくりが一体的に向上していく可能性が広がる。

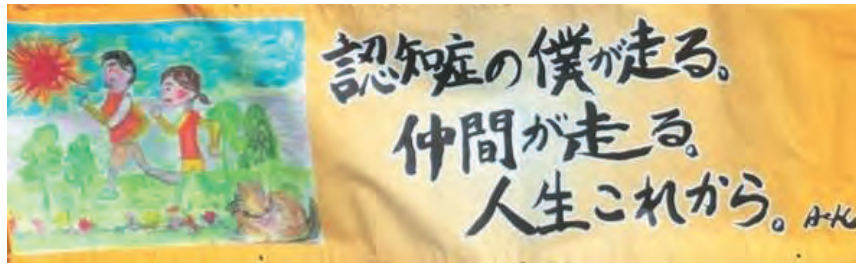
問題とされる状態がみられる本人が、好きなことや得意なことを活かして地域の中で活躍する機会をつくると、地域の一員としてともに暮らしていける可能性が広がる。

本人は、認知症バリアや制度のはざままで様々な生きづらさを抱えており、本人が声をあげられるよう、推進員も声をあげ続けることが非常に重要。

介護事業所の地域交流スペースを、地域住民や子供たち、専門職の交流・活動の場としてフルに活かしていくと、地域の多様な人たちのつながりや活動の拠点になる。

事業所の入居者で地域とつながりながら楽しく暮らしている本人の発信支援を行うことで、在宅以外で暮らすようになってからも地域でも生きる希望を、地域の人たちや専門職、行政職にリアルに伝えていくことができる。

異分野の活動をしている地域の人や企業の人たちとの出会いと対話も大切。「ともに生きる」発想や可能性、アイデアをみんなで広げながら、一緒にやってみると、少しずつだが変化が起こる。



認知症本人が走る姿は  
本人たちを 励まし  
多くの人を照らす「希望のリレー」になる

「みんなの談義所しながわ」の合言葉  
\* 上部の絵：ともに活動を続けている柿下秋男さん作



Iさん（グループホームに入居中）

- ◆入居直後、不安や混乱が増し、眠れない夜が続く。
- ◆本人にやりたいことを聞く。  
「長年やっていた書道教室を、またやりたい」。
- ◆介護事業所の地域交流スペースで書道教室が実現。
- ◆地域の子供たち、大人たちが通ってきて、Iさん大活躍。
- ◆それをきっかけに、とても安定。豊かな表情、言葉が出る。
- ◆母親らしさが蘇り、家族も大喜び。「たくさんの人たちの中で安心」。
- ◆区から、イベントで使う横断幕の毛筆書きの依頼が入る。



子連れ出勤風景：育ちゆく子らとともに 若者の幸せを祈りながら

## Ⅱ 本人視点にたって人や事業等をつなぎ、地域共生を一步一步

- 事例No. 7. そこに暮らす人と住みたい地域を一緒につくる  
～地域の住民力とともに、あるものをつなぎ活かしあいながら、草の根で、息長く続ける～  
鹿児島県・大和村 保健福祉課・地域包括支援センター 早川理恵（兼任）
8. 出会い・語り合い・ともにいたらきながら、地域共生を無理なく、自然体で広げる  
～農園を地域共生の推進拠点として、人と地域、事業をつなぐ～  
新潟県・湯沢町 健康増進課・湯沢町地域包括支援センター 國松 明美（兼任 保健師）  
アクション農園倶楽部担当 林 君江（囑託）
9. 本人が輝く姿が、地域を変える、地域が育つ  
～人も、ペットも、共に安心して生き生き暮らせる町づくり～  
岩手県・矢巾町 矢巾町地域包括支援センター・えんじょいセンター 鱒沢陽香（専任 社会福祉士）
10. カフェから飛びたて！本人の望みを地域でとまかなえ、活躍のバトンをつなげる  
～コロナ禍等のピンチを、地域での新たなチャンスに変える～  
神奈川県・大和市 上草柳・中央地域包括支援センター 石毛幸子（兼任 保健師）



そこに暮らす人と住みたい地域を一緒に作る  
～地域の住民力とともに、あるものをつなぎ活かしあいながら、草の根で、息長く続ける～

鹿児島県・大和村 保健福祉課・地域包括支援センター 早川理恵（兼任）

キーワード：住民主体、住民の営み、集い、ご近所会議、地域文化、多世代、総活躍、統合、共生

1万人未済

1～5万人未済

5～10万人未済

10～20万人未済

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

●推進員活動情報ダイジェスト

＜自治体情報＞ 2022年4月1日時点

◇人口 1,427人 ◇高齢化率 43.0%  
◇圏域数 1 ◇包括数 1（役場内）

＜認知症施策のビジョン・方針等＞

- ◆自分が選んだ場所で安心して心豊かに暮らす
  - ・認知症の有無にかかわらず、ともに暮らす
  - ・住民が主体になった活動による地域づくり
  - ・地域に足を運び、住民の営みからヒントを見つけ出す

＜推進員の主な活動＞

赤ちゃんから高齢者まで、全世代の保健・福祉全般に関わりつつ、認知症施策全体を企画・実施・推進

＜今回報告する活動＞

- ①地域にある「集い」を見つける・活かす・強める
- ②認知症の人のご近所版ケース会議（ご近所会議）
- ③「すなおにキビキビ体操」のYouTube動画作成に参画

＜推進員の配置状況＞ 2015年度より

◇1人（兼任）：行政・地域包括（直営）

＜行政と推進員との関係づくり・協働＞

認知症施策を担当する職員／推進員が、所属する保健福祉課の職員や上司、そして村役場の他課の職員とも日常的に関係をもち、分野横断で取組を実施・継続・発展できるようにつなぎ役を心がけている。

＜活動のプロセス＞

- ①地域の中にすでにある「集い」を見つけ、足を運び、それぞれの特徴や営みを知り、自主的な住民の活動が持続・発展していくように、情報提供や支援等を続けてきている。
- ②認知症の人が暮らす近所の人たちが声をかけあって集まり、情報や気づきを共有し話しあう機会を積み重ねている。
- ③0歳～102歳（認知症の人も含めて）が参加するご当地体操の動画を、住民・専門職・多様な立場の人たちと作成。

＜活動を通じた変化・成果＞

- ①「集い」を拠所に、それぞれならではの支えあい継続中。
- ②細やかな情報・気づきを共有しながら「ともに暮らす」道をみんなで見つけ、工夫する力を伸ばしている。

●推進員活動のシーン

地域に足を運び、住民の営みからヒントを見つけながら、住民が「ともに生きる」力を支え、伸ばす

①地域の中にある集いを大切に

様々な集い  
(他にも様々)



活動の形もいろいろ (例)  
\*誰しも役割がある



活躍・学びあい・伝承

②ご近所ケース会議（ご近所会議）



困りごとが起きた時、会議室で専門職だけで検討するのではなく、本人や家族とご近所の人たちがその地域で集まり、具体的な情報や気づきを持ち寄りながら、ともに暮らしていく知恵と工夫を出し合っている。  
困りごとが起きたピンチの時を、本音で話し合い、ともに生きる活路を広げるチャンスとして活かしている。

③「すなおにキビキビ体操」のYouTube動画作成



子供も大人も、認知症でなくてもあっても、この美しい風土の中で共に生きている仲間がいる。これからはいっしょに元気で暮らそう！というメッセージを込めて地域の多様な人たちと作成。  
健康&共生プロモーション動画。

## そこに暮らす人と住みたい地域を一緒につくる

～地域の住民力とともに、あるものをつなぎ活かしあいながら、草の根で、息長く続ける～

### 1 この活動の背景・きっかけ

- ・高齢化率が43%を超え、地域共生は、“いつかそのうち”の漠然としたビジョンではなく、今、日々の中で切実に求められている課題となっている。
- ・資源も人手もお金も限られている中で、新たに事業を始めるというより、地域にあるものを見つけ、大切に活かし、強めていくことを続けてきている。



### 2 この活動のプロセス:最初の一步、その後の展開

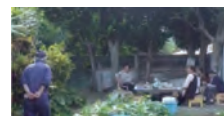
#### ① 地域にある「集い」を見つける・活かす・強める

- ・小さな村でも地域によって暮らし方や課題は違う。役場の中において困った相談を待ち受けているだけでは川下対策に追われる一方で、本当の課題解決にならないと痛感。地域に足を運び、そこで暮らす人の様子や動きを見たり、話しをきいているとそれぞれの地域の人たちが集っている場や機会があることが見つかった。
- ・それらに通って一緒に過ごさせてもらおうと、活動の形もいろいろ。そして集っている人それぞれ誰しもが何らかの役割をはたしていることが見えてきた。
- ・集っている人たち自身は、その特徴や役割を意識せずに行っていることも多く、それらをさりげなく伝え続け、集いの意義や互いの役割を大切にしよう意識の醸成を続けてきている。
- ・その集いに役立つような行政情報を伝えたり、必要なら財政支援についても相談・工夫しながら、その集いの人たちが主体的に活動が続けられる応援をしてきている。
- ・それぞれの集いの特徴や動き、そこで活躍している人たちの様子を、他の集いに伝え参考にしようしてもらっている。住民にも集いを伝え、つながるきっかけにしている。



#### ② ご近所ケース会議「ご近所会議」

- ・認知症に限らず、困りごとが生じた時に、(可能な範囲で)本人、家族、ご近所・友人が声かけあって集まる「ご近所会議」を地道に続けている。
- ・問題点やできないことの言いあいにならないように、ともに住んでいるこの地域の良さ、そして困りごとが生じている本人/家族のいい面や力を具体的にみつけ伝えあい、できることを一つでも多くみんなで出し合って前向きに話し合う、会議のスタイルを育ててきている。



小さい個別解決の積み上げ→気づきの広がり  
が地域の力に  
積み上げをしぐみに  
(施策)

#### ③ 「すなおでキビキビ体操」のYouTube動画作成

- ・行政では、高齢・認知症の分野はもとより、子育て・子供分野、若者の仕事確保・定住、農林漁業や観光も含めた産業振興、災害対策など、すべてが地域のつながりと住民力が重要課題。
- ・「村の歴史を大事に」との思いから動画作成を企画。認知症の人も多数参加。結果的に観光・健康・文化・郷土愛など住民みんなが、地域や暮らしへの関心や愛着を高め、つながりを大切にしながら、一緒に元気に暮らしている様子が伝わる動画として完成。
- ・多様な仕事を兼務しながら培ってきている役所内や地域の縦横のつながり、そして何よりもこれまで地域で出会ってつながりのある村民さんに参加協力してもらいながら、一緒に楽しく、元気になる動画を作成。



### 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ・事業や業務をこなすことを目的にせず、本人目線、住民目線で考え、動く。長い目でみながら、進む。
- ・住民の生活の営みをベースに、その具体をしっかり確認しながら進む。
- ・大和村に暮らす人たちやあるものを、自分が新鮮に知る。その豊かさにあらためて感動したり、元気をもらいながら、その存在を多くの住民・関係者にも伝えていくこと。
- ・認知症の地域づくりのために、むしろ認知症の枠を外して、異分野とつながり、一緒に話し合い、動いていくこと。

### 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- ・住み慣れた地域で暮らし続けることには、総論賛成だが、実際になると「本当は家がいい、ここで暮らし続けたいけど、周りに迷惑をかけたくない」「家族の希望で……」「困りごとに他人が触れられない」など、ハード・ソフトともに足りないことが多い。特に離れて住む家族が本人や地域を抜きに入所や転居を決めてしまう場合もある。
- ・施策・事業を活かしつつ、ご近所会議などを通じて、当事者と住民、関係者が一緒に考え、相互理解と地域支援力を高めながら、限界点を高めていくことが重要。その実例を積上げ、「できる実際」を地域に広げていく。
- ・自宅は無理な場合も、自分の集落でこれまでのように暮らす「集落長屋構想」を長年かけて話しあい実現へ。



## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】

- ・認知症が現れ始めても、なじみの地域の人たちが、それまでどおり、その人とふつうにつきあい続け、さり気なく見守ったり、カバーしてくれることで家で暮らせている人が多い。
- ・一人暮らしの認知症の人、家族がおられても遠方におられたり実質関わるのが難しい人も増えている。そうした場合も、近隣や地域の人たちとのつながりの中で、孤立せずに、一人暮らしを続けている人が多い。
- ・困りごとが生じた時は、ご近所会議で、本人のそれまでの暮らし方や本人の好きなこと・良さを大事に話して解決の糸口を住民同士なりに考えていくので、追い詰められたり孤立しないで、地域の中で暮らし続けられている人がいる。
- ・“集い”の場やふだんの暮らしの中で、そして今回の動画撮影などのイベントなどの際に、認知症として特別に扱われるのではなく、本人たちが村民のひとりとして、他の人たちに交じって、一緒に参加して楽しんだり、自然と活躍している様子が見られている。
- ・認知症があっても、この村の歴史や生活の中に息づいている文化については、よく覚えていて、自然な振る舞いとして伝えてくれる人がたくさんおられる。“集い”などや多世代と接する機会に、本人がそれらをうれしそうに語ったり、動きで示してくれたりして、日々の中での大切な発信・伝承役となっている。



### 【家族】

- ・「地域に出すのは恥ずかしい」「家族でみなければ」といった意識から、「地域の人たちにわかってもらいながら、本人が地域とつながり続けることが、本人にとっていい、家族にとってもいい」という人も出てきている。
- ・子供たちや若者が、集いの場や地域の催しなどで、認知症の人に自然に触れ合ったり、本人たちから教えてもらう場面が増えている。祖父母など、家族が認知症になってからも地域の中でいっしょに過ごすことの大切さを体験しながら育てている子どもたちや若い人もみられている。

### 【地域の人】

- ・自分たちが集まりたくて生まれた各地の集い場が、住民主体で無理のないカタチで続いている。
- ・ご近所会議等を通じて、本人視点、本人の声の大切さを自然と身につけてきている人が多い。

### 【専門職・行政】

- ・行政や医療・介護制度の枠の中では、地域で暮らし続けるための支援に限界があるが、住民を主体にした場や人、しぐみを大事にしてきた中で、「地域で共に暮らす」実際が少しずつ広がってきている。
- ・住民主体の「集い」やご近所会議等を通じて、本人発信支援、社会参加支援、認知症カフェ、本人と家族の一体的支援、チームオレンジ等が、自然に生まれ、つながり、無理や無駄なく、草の根的に育ち、本人家族の身近なところで根づいてきている。

### 【情報の流れや協働】

- ・認知症に特化しない取組を通じて、多世代・多分野に理解が広がり、早めの気づきやつながり、分野を超えた連携・協働が、自然体で広がってきている。
- ・地域の人たちが、日常的に本人に接したり支えあっていることが、「備え」や「早目の気づき・相談」につながるようになってきている。

## 6 今後の展望

- ・認知症になってからも地域で共に生きる実例を多世代の人たちも含めて一緒にさらに増やしていきたい。
- ・「地域で共に」を叶えていくために、自宅に固執しすぎず、「集落長屋構想」の具体化を進めていく。

### この活動を通して見えてきたポイント

新たに事業をしようと思いきすぎないこと。  
できない理由探しをずっと進まない。地域にあるものを見つける・活かす・強める。

そこに暮らす人が動かねば、住みたい地域はつくりえない。長い目で一步一步。


こたえもヒントも、そこに暮らす住民がもっている！  
足を運び、暮らしを知り、本人や住民に教えてもらう。  
誰か一人からはじまる。

本人、家族、住民同士が、この地域の好きな点、相手のよさに目を向けて、ここで暮らしていくために  
“できること”を一緒にみつけて、限界点を今よりも  
少しでも高く。

本人や住民の声から、行政／推進員のズレを自覚する。  
地域に溶け込んで一緒に考える。

地域の風土・文化が多世代をつなぐ一つの鍵。認知症の人が自然に活躍・大事な担い手。

**認知症の方のご近所版ケース会議(ご近所会議)が何かが見つかる事例**



俺の父ちゃん認知症、よろしく！  
(大事な一言、すごいね～)

いいねん、ご機嫌だから  
嫌なこと忘れてよかった  
便ムリ！

介護者の心得を学ぶ  
(周囲も手出ししやすくなる)

すごく歩いてる  
14時と16時にみかける  
光るベストでパトロール

一緒にウォーキング  
力を合わせて  
本人の生活に  
あった具体策

うちの近くでおしっこ

デイサービスでは津軽海峡冬景色が18番  
(じゃあ老人クラブに誘って歌ってもらおう)

役割創出

麻雀おいで 介護者支援

何だか気軽な会だな 認知症でも大丈夫かも

こうやって考えてもらえて心強い 安心感

うちよりそっちが大変じゃん！  
ピアカウンセリング

早めに受診しよう  
セルフケアカアツ

「何気ないこと」が何かにつながり大事。見えないところにも大きな意味が

**公的サービスでは対応できなかったが地域互助の力で住民が力を取り戻した事例**

気になる要因: もの忘れ(軽度) 難病


公的サービス: 利用しない

気になる状況: 1日中ほぼ閉じこもり

専門家の提案だと: デイサービス 物忘れ外来受診 介護予防教室 → 拒否

**住民活動だとうなった**

- ①同級生のご近所さんが「一緒にサロンでコーヒー飲もう」
- ②「久しぶり～！次も来てね、待ってる！」と言われリピーターに
- ③NHKがサロンの取材に来た
- ④「元気になった人」として自宅取材を受けテレビ放映される
- ⑤「テレビ観たよ！」と島外在住の親戚からも電話を受け喜ぶ
- ⑥入れ歯の治療に行く
- ⑦服がちょっとおしゃれになる
- ⑧娘が手作りの服を送る
- ⑨「娘が作ったの」とサロンで披露する



**「役割」「生きがい」「楽しみ」「喜び」の力で本人が力を取り戻す**

**「すなおにキビキビ体操」のYouTube 動画作成：健康と共生のふるさとをいっしょにつくろう！**

～オール大和村で作ろう！～を制作コンセプトに、作詞作曲から振り付け、出演まですべて大和村民やゆかりのある人で作成。  
0歳～102歳が参加。撮影地は、世界自然遺産エリアを含む大和村自慢の景勝地や11ある集落も紹介。



動画は YouTube の大和村チャンネルで公開しています。 <https://www.youtube.com/watch?v=Rtqwm8JfdKA>

出会い・語り合い・ともにたらしながら、地域共生を無理なく、自然体で広げる  
～農園を地域共生の推進拠点として、人と地域、事業をつなぐ～

新潟県・湯沢町 健康増進課・湯沢町地域包括支援センター 国松 明美（兼任 保健師）  
アクション農園倶楽部担当 林 君江（囑託）

キーワード：自分事、アクションミーティング、農園、社会参加、本人発信、声の記録、多資源協働、SOS ネットワーク、連動、共生

1万人未満

1～5万人未満

5～10万人未満

10～20万人未満

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

●推進員活動情報ダイジェスト

<自治体情報> 2022年3月末時点

◇人口 7,960人 ◇高齢化率 39.5%  
◇圏域数 1 ◇包括数 1（直営）

<認知症施策のビジョン・方針等>

◆住み慣れた地域で自分らしく暮らし続ける  
・立場を超えたアクションミーティングを積み重ね、行政と専門職、地域住民が自分事として考え、ともに動く

<推進員の主な活動>

◆認知症施策全体を担当し地域支援体制を築く  
・担当事業、担当地区、自身の生活の中で、ともにめざす方向に向けて進んでいくための推進役を担う  
・最も大事な資源である認知症の本人とその家族の思い願いをかなえる資源を増やし、つなげることで、認知症の人が安心して暮らし続けることができるようにする

<今回報告する活動>

本人視点で一緒に考えるアクションミーティングを出発点に、そこから生まれたアクション農園を続けながら、本人や地域にとって必要な取組みにつなげ展開している活動

<推進員の配置状況> 2011年度より配置

◇7人（兼任）：行政・直営包括6、民間（小多機）1  
・行政の推進員は異動しても推進員  
・ケア現場から活動を展開する民間の推進員を小多機に配置

<行政と推進員との関係づくり・協働>

・行政推進員は課内及び課を超えて継続的な協働関係を作る  
・行政と民間の推進員が各立場を活かして協働

<活動のプロセス>

アクションミーティングを開催。やりたいことが一致した人がチームを結成しアクション開始。チームのひとつ「アクション農園倶楽部」がアクション農園を継続。畑に集う本人・家族・地域の人・支援者の声を聴き、共有し、取組や施策に活かしている。

<活動を通じた変化・成果>

・こもりがちな本人を含め多様な人たちが出会い、語りあい、ともに働き、つながり、支えあう場に成長してきている。  
・農園で早期相談・支援、認知症カフェ、チームオレンジ、見守り・SOSネットワーク、ケアパス改良等の機能が連鎖的に派生し、本人参加での共生の町づくりが、無理なく、広がっている。

●推進員活動のシーン

本人視点で一緒に考え、アクションへ！ 農園を続ける中で“ともに”の体験が生まれ、広がる

アクションミーティングで、ともに動くチーム誕生！

アクション農園を活動拠点にひたすら続ける

立場や職種を超えて、声かけあって集まる。



\* 畑の日を楽しみに集まる本人や地域の人、家族、マンションなどの新住民、専門職、行政職が増えていく。  
\* 畑で本人が自然と動き出し、智慧や技を伝授し活躍。生き生き、元気になる！多世代間の対話や交流が広がり、新たなアイデアや工夫が生まれて自主的活動が展開。

農園の体験・つながりを、町全体に活かす・広げる



見守り・SOS ネットワーク  
各地区でアクションミーティング。  
模擬訓練も織込み実効性強化



湯沢町 お役立ちかわら版  
（認知症ケアパス）

# 出会い・語り合い・ともにたらしながら、わがまちの地域共生を、無理なく自然体で広げる ～農園を地域共生の推進拠点として、人と地域、事業をつなぐ～

## 1 この活動の背景・きっかけ

- ・超高齢化が進む一方で、豊かな自然に抱かれた湯沢町では、リゾートマンションへの移住人口の増加が続き、総人口の2割。住民と新住民との共生も町の課題。
- ・課題山積……、一人ではできない、事業をこなしていても、実質はあまり変わらない。認知症の人が地域の中で元気になるってほしい、認知症の有無や立場にかかわらず、この町でみんなが一緒に暮らしやすくなっていくための方策が必要と思った。



## 2 この活動のプロセス:最初の一步、その後の展開

### ①アクションミーティングの開催

- ・行政と専門職、町民が、方向性を共有しながら一緒に考え、動き出すために、アクションミーティングの企画をする。役所内の職員や上司、町民や医療・介護職にねらいを伝えて、知り合いに声をかけ一緒に参加してほしいと呼びかける。
- ・30名近くが集まり、認知症の人からみて何が必要か、何をやりたいかを、自由に楽しくアイデアを出し合う。やりたいことが同じ人たちでチームを結成。できることから動き出すアクションプランを各チームでつくって、それぞれのペースで動き出す。



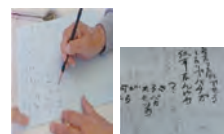
病院の看護部長やマンション管理の人、同級生など、声かけあって多様な人たちが集まる。話せて楽しい!

### ②アクション農園倶楽部のメンバーの「やりたい!」に、様々な町民が賛同・参画

- ・チームの一つ“アクション農園倶楽部”は、『お日さまの下でみんなが笑顔で元気になるう、畑作業しながら認知症の人の理解を広めよう』を合言葉に、申込みなくても誰でも気軽に行けて、自由に過ごせ、開放的な場という共通イメージでスタート。
- ・こうした場を作りたい、とメンバーと行政（推進員等）が、関係者や知人、家族に伝えていく中で、一緒にやってみたいという町民や専門職、土地を貸してもいいという人、物品提供、看板作成などを申し出てくれる人などが数珠つなぎにでてくる。
- ・ミーティングから約5か月後に農園がスタート。毎週火曜9～11時とだけ決め、あとは自由。毎回16～20人が参加し、顔触れは認知症の人は約3割、他は家族、マンション住民も含めて地域の人、ケアスタッフなど。その時々、人それぞれ、自由に過ごしている。
- ・言葉が出ない人、耳が遠い人が、思いを伝えたりやりとりできるよう畑にノートとペンを置く。
- ・毎回、畑での本人や参加者の声や様子を、“そのまま”ノートに記録。包括内で回覧。嬉しいエピソードやちょっとした変化や気づいた点を共有し、必要な支援や連携につなげている。



人と人がつながり、動き出す。



畑にノート。筆談ができる。

## 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ◆とにかく続けること。当日は、雨の日風の日、暑い日も寒い日もそこに行き、そこにいる。
- ◆主役は本人と町民。リーダーも町民（マンションの管理人）。見守る。
- ◆農園では、行政/保健師/推進員という立場や職種の鎧を脱いで、出会いを喜び、汗を流す。畑で起きることを一緒に楽しみ、一緒に悩む（例：鳥の被害など）。喜怒哀楽を共に。
- ◆本人が自由に居心地よく過ごせるように（作業する、お喋りする、風景を眺める、など自由に）。
- ◆畑でとらえた本人や町民の自然な声やつぶやき、うまれていることを、施策・事業として活かす。施策・事業の枠組みではなく、本人と地域の人が必要としていること、一緒にできることをもとに、施策・事業をつくっていく。
- ◆畑の参加者・関係者と本人がどんな思いか、何を求めているか、本人視点で考えていくことをやり続けている。



ピンクの作業着が推進員

## 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- 足の便。漠然と話しあうと難しい問題になるが、「この人が来るために、何かできないか」、一人のことをみんなで話しあっていると、自分が来るついでに送迎してくれる町民、専門職や事業所、社協など、それぞれができることをやってみよう、という動きが生まれた。
- 畑の確保。持ち主の方の都合で、借りれなくなったことがこれまで2回。そのたびに、みんなが動揺したが、「農園をつづきたいよね」という思いは一致。それぞれがそれを周囲や地域に伝える中で、土地を貸してくれる人が新たにみつかった。同じ場所ですつとでなくても、逆に活動やそのねらいを広げるチャンスにもなる。
- 雪が積もる冬季。春を楽しみに月1回福祉センターに集まり、運動や来季に育てる作物の相談をしている。

畑行きたいよね。送迎ちょっと手伝うよ。



## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】

- ・自宅できちもちろみがちだったり、介護サービスを使おうとしなかった人が、農園を楽しみに参加するようになる。施設入居者で参加を希望し、職員と参加する人もおられる。畑で表情が柔らかくなり笑顔が出る。
- ・自然とつぶやいたり言葉を発し、ノートに書いて自分から伝えようとするようになっていく。
- ・土いじりや耕し、植え付けや草取り、収穫、後片付け、そこにきた子供の相手や見守り役など、その人なりにできることを見つけて、自然と動き出す。何もせずみていること、いつもの場にすわっていることが、その人の役割になっている人もおられる。
- ・観天望気や畑作業の技、人への配慮、子育てなどの力と技を発揮。その場面で、周りが自然にその人へ尊敬の念を表すので、本人が自分を取り戻し、自信を蘇らせている。
- ・畑で友人や知り合い、地域の人に再会できて、喜んでいく人もおられる。
- ・「農園に来る」ことが1週間のペースやはりあいになって、暮らしのリズムが整ったり、ふだんの暮らしが安定し前向きになっている。

### 【家族】

- ・家族同士が介護だけでなく自分の生活に情報交換するなど、気兼ねない家族の集い場にもなっている。
- ・家の中では見られない本人の晴れ晴れ生き生きした表情や活躍している様子を見て、喜び、現在やこれからについて、安心できるようになっている。本人と家族の一体的支援の場に自然となっている。
- ・畑にいつも行政／推進員や包括、専門職がいるので、何気なくちょっとしたことを相談し、その場で助言や情報を得たり、必要な支援・サービスにつながりやすくなっている（早期相談・総合的支援）。

### 【地域】

- ・誰かが別の人を誘ったり、口コミで、マンションの住民を含めて地域の人やボランティア、乳幼児連れの若い人、園児や生徒、障害の若者など、集う人の輪が広がっている。立場や世代を超え、誰もが受け入れられる場、それぞれなりの活躍の場となっている。
- ・農園で、楽しそうに生き生き過ごす本人たちに触れる、認知症の人とのいいファーストタッチの場になっている。認知症のイメージが変わり、地域の中でふつづつきあい続けることや、本人の思いや力を大切にすることを、畑での体験を通じて、自然体で学んでいる。
- ・農園で過ごす時以外にも、ふだんの本人の見守りや生活支援につながりチームオレンジに。

### 【専門職・行政】

- ・医師や病院職員、介護職員、行政職員が、本人や地域の人たちが楽しく過ごす場面をみて、認知症観が変わり、サービス提供ありきから「本人が自分らしく暮らす」「地域の中で暮らし続ける」といった本人視点、地域共生の発想に変わってきている。
- ・病院に実習で来ている医学生や研修医、看護学生も参加。新鮮な学びの機会になっている。
- ・畑の中で、本人、家族、ケアマネ、ケア職員が、ケース担当者会議を開いたり、その場で本人の現状や意向を一緒に確認し調整を図る等、地域支援と医療介護を一体的・効率的に進める場にもなっている。
- ・介護保険未申請やサービス利用に躊躇している本人や家族が、畑で専門職となじみのになって、適切なサービスにつながるなど、初期集中支援チームの機能も果たしている。
- ・見守り・SOSネットワーク、ケアパス等を施策を本人視点で見直し改善につながっている。行政が施策や事業に取組時に、『いいよ』と前向きに理解・協力してくれる人や『一緒にやろう』と企画や運営を自主的に手伝ってくれる人が増えている。
- ・担当課、他課の職員（総務、広報、障がい、農政、警察など）が畑に協力したり応援してくれる人が増え、他の業務についても話しやすく、進めやすくなっている。

### 【情報の流れや協働】

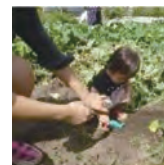
- ・専門職と顔なじみで気軽につきあえるようになり、地域の気配りな人等の情報を包括等に早目に伝えてくれたり、困難とされている人が地域で暮らし続けるための相談・協働をしやすくなっている。



自然とからだ動き出す。見事な所作、技！



通りがかりの人と一緒に。



畑で幼子が土いじりに夢中。



ママが畑でリフレッシュしている間、赤ちゃんの相手を本人が。

## 6 今後の展望

アクション農園倶楽部を続けながら、認知症の人、そして多世代・多様な人たちの出会いとつながりを広げ・深めていきたい。推進員が異動しどこに行っても推進員機能を果たせる（むしろ別の場で種をまいたり、新たなつながり・活動を広げ合流をはかれる）。推進員や推進役を町中に増やしながらか共に支えあえる体制を育てていきたい。

### この活動を通して見えてきたポイント

住民と専門職、行政職が出会い、自由にアイデアや意見を出し合って一緒に動き出すためのアクションミーティングを、全ての事業の最初に。

本人の声をしっかりと聴き、共有し、ヒントを集めながら、支援や施策にしっかりと活かす。

話しあっておしまいにせず、アイデア・イメージを具体的に共有し、できることからアクションへ。

ふだんからのつながりを活かして、行方不明等危機時のSOSネットワークや支援体制の実効力を高める。

本人も住民も専門職、行政職も、気持ちのいい場での出会い、自由に楽しく一緒に過ごす体験をする。

同じ方向を向いて活動する多様な立場・年代の推進役を地域の中で増やし、ともに地域共生を進めていくフォーメーションをつくる。施策に位置付け、中長期的に推進員活動を促進する。

「こうだといいいね」 望みを同じくする人たちが、一人づつ、息長く、アクション！

「畑、やれたらいいね」と、みんなで提案をつぶやいていたら・・・



土地を貸してくれる人がつながった！  
「草取りしてくれるなら使っていいよ」



苗、種、肥料、農具、その他、次々と差し入れ  
「少しだけでも使って」。色々な人が持ち寄ってくれる。



看板なら任せて。足組作るよ。  
町の看板屋さん、土建屋さんが：知人つながりで



カラス対策に、案山子もいるよね。  
手作りで、その後、何代も案山子が受け継がれる。

人のつながりが広がって  
色々な変化が自然発生！

思いがけない  
力を発揮

元、土木作業  
やってたんだ

(引きこもっていた人が)  
自分で採ってみたいな

マンション住民とグループホーム入居者、  
そして自宅で妻と2人暮らしの認知症の  
人が・・・自然と一緒に作業に励む

「お彼岸だからみんなでおはぎ食べようよ。」  
地域の方から差し入れです。  
地域の人も認知症の人と自然に。



畑へ「行きたい」。  
ヘルパーさんや施設職員と一緒に。

他の介護職場の職員  
同士が畑でつながる。

傾聴ボランティアさんと認知症  
の人が畑で、ゆったり、じっくり。

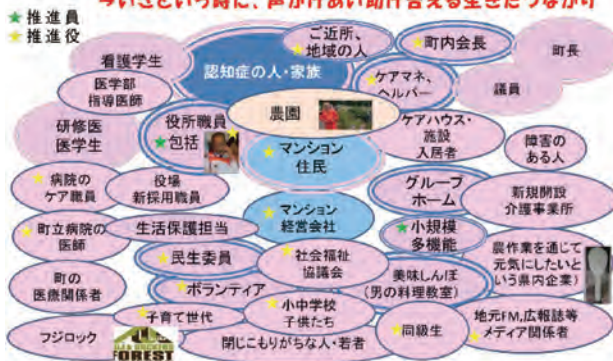
孤立しがちだった人たちが、畑で出会えてうれしい！ 自然と仲良く、元気に！



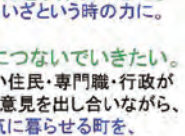
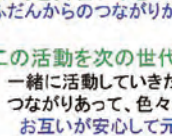
1回1回の本人の声と  
様子を記録。  
畑の軌跡、宝物。

湯沢町の希望の地図

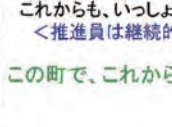
農園での出会い・楽しさ・喜びをともにして生まれたつながり  
→立場や職種を越えた自然で楽しい、変えあえるふだんのつながり  
→いざという時に、声かけあい助け合える生きだつつながり



一人ひとりが、この町を舞台に、思いと力を、伸びのびと。  
\*ふだんからのつながりが、いざという時の力に。



\*この活動を次の世代につないでいきたい。  
一緒に活動していきたい住民・専門職・行政が  
つながりあって、色々な意見を出し合いながら、  
お互いが安心して元気に暮らせる町を、  
これからも、いっしょにつくり続けていきたい。  
<推進員は継続的な伴走・推進役>



この町で、これからも一緒に

**本人が輝く姿が、地域を変える、地域が育つ**  
～人も、ペットも、共に安心して生き生き暮らせる町づくり～

岩手県・矢巾町 矢巾町地域包括支援センター・えんじょいセンター 鱒沢陽香（専任 社会福祉士）

キーワード：自分事、わんわんパトロール隊、介護職員、啓発イベント、希望宣言、本人発信、社会参加、チームオレンジ、共生

1万人未滿

1～5万人未滿

5～10万人未滿

10～20万人未滿

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

**●推進員活動情報ダイジェスト**

**<自治体情報>** 2022年4月1日時点

◇人口 26,924人 ◇高齢化率 27.5%  
◇圏域数 1 ◇包括数 1（委託）

**<認知症施策のビジョン・方針等>**

◆認知症になっても安心して暮らせる町  
・スマイルディメンシアやはば  
・自分事として、考える。立場や世代を超えて、ともに。

**<推進員の主な活動>**

・医療連携・認知症介護部会（ケアパス、多職種協働）  
・安心安全おたすけ部会（見守り SOS ネットワーク等）  
・わが町つながる部会（メイト連絡会、社会参加支援等）  
以上をつないで、チームオレンジの結成と活動展開。

**<今回報告する活動>**

①地域にあるものを活かして地域のチカラを引き出しながら、多資源協働で本人発信、社会参加支援に取り組む。  
②それを日常的な活動として定着していくために、チームオレンジの体制整備を進めている活動。

**<推進員の配置状況>** 2012年度より配置

◇2人（兼任）：委託包括2  
・一人は生活支援コーディネーターと兼任。

**<行政と推進員との関係づくり・協働>**

・日常的にやりとりをし、話しやすい関係を作っている。  
・推進員から行政担当者に、活動しながら考えたことや提案、他地域の動き等を伝え、方向合わせをしながら進める。

**<活動のプロセス>**

①認知症を自分事として町民や関係者と話しあう中で、わんわんパトロール隊やボランティア活動、介護職員との啓発活動が生まれる。希望を持って共に暮らすことを目指して、イベントの刷新も行い本人発信・社会参加活動に展開。  
②推進員活動を通じて育ってきているものをつないで仲間とともにチームオレンジを結成。拠点作りや協働活動を展開。

**<活動を通じた変化・成果>**

・自分事として考え動く多世代・多資源が連鎖的に増加。  
・本人発信、社会参加の機会が日常の中で増えてきている。

**●推進員活動のシーン**

**地域のチカラがある！ 自分事として町民・専門職がゆっくり育ちあい、本人が社会参加し輝く地域に！**

自分事として自主活動を結成。楽しみながら活躍。



矢巾わんわんパトロール隊

愛犬家が、日々の散歩をしながら、高齢者を見守る。



介護職員がジュウミンジャー

介護職員の有志で結成。町民や小中学生に、わかりやすく、心に残る啓発活動を楽しく展開。



おれんじボランティア結成

地域で活動したいサポーターと自主活動組織を結成。様々な事業の頼もしい協力者（助っ人）。

方向性と焦点を確認：希望をもって地域で共に

イベントを刷新：希望を伝える、本人発信、本人参加で

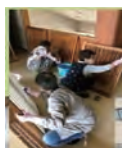


わが町で本人発信は無理？  
本人は発信できる！  
みんなの意識が変わる！



「認知症とともに生きる希望宣言」  
介護職員有志が、宣言全文を朗読。  
希望のリレーが広がる。

地域共生に向けて、人・事業等をつなぐ。ともに、これからのを。



活動拠点をみんなでつくる  
使われなくなっていた町施設を一緒に改装。チームオレンジ+多様な地域活動の基地に。



本人が社会参加し活躍  
支援される側から、地域の支え手として。日々の中で、一人ひとりがともに。

# 本人が輝く姿が、地域を変える、地域が育つ ～人も、ペットも、共に安心して生き生き暮らせる町づくり～

## 1 この活動の背景・きっかけ

- ・矢巾町では、医療・福祉・介護、地域の代表と行政と一緒に、「やさしさはばたく認知症支援ネットワーク連絡会」を結成し、「医療連携・認知症ケア検討部会」、「安心安全おたすけ部会」、「わが町つながる部会」を設置して、本人・家族を中心に安心して暮らせる体制作りを進めてきている。
- ・体制を整備しつつも、町民、専門職が認知症を自分事として考えながら、地域で暮らし続けるための地域支援力と個別支援力を高めていくことが課題になっていた。

やさしさはばたく  
認知症支援ネットワーク連絡会



## 2 この活動のプロセス:最初の一步、その後の展開

### ①自分事として、町民・専門職が考え、共に活動するしくみをつくる

#### ●自分事として…まずは推進員自身が考え、大切なことを続けていくための仲間を増やす

- ・自分が認知症になってから、この町で生きていくことを考えてみた、「家族同様の愛犬と暮らし続けたい。自分が世話出来なくなった時、支えてくれる仲間が欲しい」。
- ・遠い未来の話ではなく、同じ思いで不安になっている認知症の本人がいるのではないかと。
- ・毎日の犬の散歩で出会う愛犬仲間にこのことを話してみたら共感してくれる人がたくさん!
- ・愛犬家とその愛犬と一緒に見守り活動をする「わんわんパトロール隊(わんぼと隊)」を企画。散歩仲間が仲間を誘いあって隊を結成。全員がサポーター講座受講、年1回勉強会。いつもの散歩をしながらの、気持ちのハードルの低いゆるい活動を継続。

#### ●介護職員の有志で、心に残る啓発を展開

- ・町内には、認知症の本人を日夜支えながら、本人たちが地域で暮らし続けることに尽力している介護職員たちがいる。介護事業所の中だけにとどまらず、地域で活躍しやすい環境をつくるために、キャラバンメイト連絡会を結成。どんな活動が必要か、できるか話しあいを重ねる。
- ・次々とユニークで楽しいアイデアが出る。子供たちにも関心を持ってもらうために、人気の戦隊モノをまねた「ジュウミンジャー」を有志で結成。交代で学校や地域を回る。

### ②活動の方向性と焦点を確認・共有、共生を目指して、本人発信・社会参加の推進を

- ・活動を繰り返しているだけだと、それが目的化してしまったり、マンネリ化してしまい、モチベーションの維持や活動継続が危うくなる。町内だけではなく他地域の情報や大綱など国の動きも踏まえて、今後の方向性やについて関係者と話しあう。
- ・矢巾でのこれまで積み上げてきたことを活かしつつ、この先の未来を一緒につくっていくために、方向性と力を注ぐ焦点について関係者と検討。これまでの取組みの見直しも行い、啓発イベントを、希望がもてるものに刷新をはかり、本人発信の機会とする。
- ・これまでの活動やそれに関わってきた人たちが、バラバラに活動しているのはもったいない。多様な仲間がつながり、本人とともに活動していくためにチームオレンジを結成。
- ・その活動拠点として、町営使われなくなっていた施設を、みんなで改修。本人や地域の人たち、専門職が気軽に立ちよる場になってきている。



チームオレンジ結成式  
本人含め73名で  
スタート

## 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ◆カタチだけこなす他人事の仕事だと、自分もみんなもつまらないし、継続しない。自分事として考え、本音で話し合い、今の日々とこれからのわが町を少しずつでもよくしていこう、と繰り返し伝え続けている。
- ◆みんな忙しいし、負担感が大きいと引いてしまう。ふだんやっていることを活かしながら、ハードルが低く、楽しい企画を、ネーミングも含めて工夫した。



## 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- 始める時より、その活動(組織)を維持・継続していく方が難しい! 新鮮に、楽しい企画を一緒に考えながら、チャレンジすることでモチベーションを維持。目的を見失わないよう、何のための活動か、繰り返し確認・共有。
- 国施策も地域も変わっていく。やってきたことを変えていく必要があるが抵抗が起こる。「自分たちが何をめざし、どう変えていきたいか」よく話し合い、変化しながら発展していくことを楽しいと感じることが出来る仲間を増やす。



## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】

- ・本人発信や社会参加支援への専門職・住民の意識が少しずつ高まってきたことで、発信したり、地域で活躍する人たちが増えてきている。

### 【家族】

- ・「本人はもうできない」、「地域でなんて無理」と考えていた家族が多いが、本人が堂々と語ったり、生き生きと活躍する姿を目の当たりにすることで、前向きになり、本人が望む地域の中での活動を応援する家族も、少しずつだが増えている。

### 【地域】

- ・わんぱと隊メンバーは、愛犬と日々活動を続けており、町内外で知られるようになった。存在自体が【身近な地域での無理のない支えあい】を地域に広げる動くシンボルに。
- ・大人だけではなく、子供たちの参加も多く、わんぱと隊キッズチームが生まれ活躍中。
- ・ジューミンジャーの活躍を通じて、幼子から後期高齢者まで、認知症を身近に感じ、明るいイメージや地域で支えあう意識を持てるようになった人は増えている。
- ・サポーター講座を受講し、地域で活動したい人によるおれんじボランティアが結成される。

### 【専門職・行政】

- ・介護職員が交代でジューミンジャーとなって、地域内を回って活躍。介護事業所で待ち受けているのではなく、地域に向いて元気な人たちともふれあいながら、介護職を身近な存在として住民に広めることにもなっている。
- ・行政の人たちも、本人や地域の人たち、専門職の前向きな姿勢、活躍を通じて、これまで以上に施策推進に積極的になっており、施策の方向性・焦点も、地域共生に向けた本人発信・社会参加の推進に舵が切られた。

### 【情報の流れや協働】

- ・わんぱと隊の活動を通じて、気がかりな人に関する情報伝達や相談、行方不明を未然に防ぐ等、日々小さな活動が継続しているからこそ、早期対応、緊急時対応の流れの強化につながっている。
- ・異なる職場の介護職員同士が智慧と工夫を出し合いながら活動しており、事業所を超えたネットワークが育ち、これからの介護や地域連携・支援、本人発信や社会参加を通じた共生社会について一緒に考え、一緒に動く大切な仲間になっている。
- ・介護職が、チームオレンジで本人と地域の人たちが活躍していくための頼もしい応援者になっている。
- ・おれんじボランティアは、生活支援サービス、出前支援、居場所運営、予防教室補助など、様々な事業の協力者(担い手)として貴重な力となっており、チームオレンジの構成員としても活躍中。



チャンスをつくと、本人は発信し、活躍！  
一人ひとり、豊かな力や自分の思いを秘めている



お手柄！  
行方不明になりかけていた人を発見



グループホーム  
ユニットリーダー

小多機  
管理者

ジューミンジャー、休憩中

## 6 今後の展望

- ◆本人たちが発信・社会参加していくためには、家族や周囲の人たち、専門職の意識変革が不可欠だが、座学での学びだけでは限界がある。新たにできた地域拠点を基地にして、本人と出会い、つきあいながら、楽しく活動する体験型で学びあい育ちあっていく機会をつくってきたい。
- ◆少子高齢社会だからこそ、子供や若者たちともどんどんジョイントし、ユニークなアイデア・企画を増やして、ともに生きる地域づくりに、息長く取り組んでいきたい。
- ◆ペットが家族のように大切な高齢者も増えていく。愛犬や動物の力も借りながら楽しい活動を続け、多様な人たち・生き物と共に生きていける地域を育てていきたい。

### この活動を通して見えてきたポイント

本人（住民）視点に立って、わかりやすく、共感しあえる活動テーマとそのネーミングを、楽しく工夫する。

一人ひとり（一匹だって）、地域の力！日々、地域をよく見て、地域の力を見つけ、気持ちのハードルの低い活動を企画しながら、楽しく、いっしょに、息長く続ける。

推進員自身が、認知症を自分事として考える。安心して自分らしく暮らしていくために“大切なこと”を推進員活動に活かし、今と未来を「ともに生きる」仲間を増やしていく。

「社会参加する役割を持つ」と、本人が輝く。  
「本人が輝くこと」で、地域が変わる。地域共生の近道。

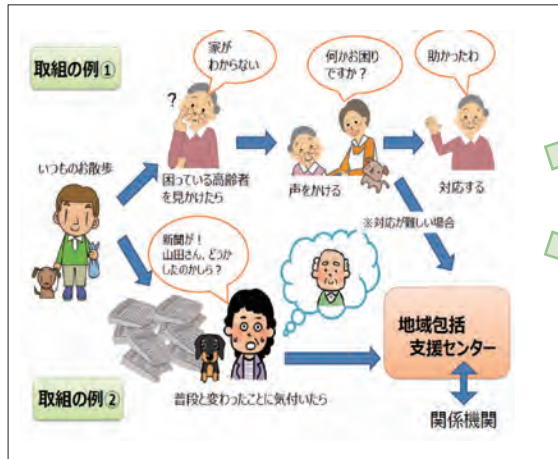
本人の暮らしを日夜支えている介護職員が、地域共生を生み出す大事なパートナー。地域でともに楽しく活躍しながら、地域支援力と個別支援力を一体的に高めしていく。

単発ではなく、他のどこで役立かを考えながら、取り組みをつなぎ、地域共生にむけて合流・統合していく。その手段として、チームオレンジを活かす。

住民、専門職の活動を、他の何かにつなげて活動の価値を高めていく。やりがい・自発的な活動力アップ！

矢巾わんわんパトロール隊

愛犬家が、日々の散歩をしながら、高齢者を見守る。



わんぱと隊をケアチームの一員として本人のケアプランに明記。



介護職員がジュウミンジャー

介護職員の有志が、町民や小中学生に、わかりやすく、心に残る啓発活動を楽しく展開。

イベントを、希望のあるものに一緒に刷新。



認知症とともに生きる希望宣言

- 認知症は脳の病気です。予防・早期発見・早期対応が大切です。
- 認知症は、誰でもなる可能性があります。自分や家族の認知症の兆候に気づき、早期発見・早期対応をしましょう。
- 認知症は、適切なケアで生活の質を高め、生き生きと暮らすことができます。
- 認知症は、適切なケアで生活の質を高め、生き生きと暮らすことができます。
- 認知症は、適切なケアで生活の質を高め、生き生きと暮らすことができます。

とらわれている古い常識の殻を破って、一緒に前を歩いて生きていこう！

自らの言葉で語り  
特別なことをしなくても…  
細く姿を地域に伝えることが  
社会参加活動！

これまでの出会いを大切に、つながり続けて、希望をもって「ともに生きる」矢巾町を、いっしょに



振り返ってみると…すべて、人と人のおつきあい

- 認知症カフェで知り合った家族さんがおれんじボランティアの会長に…
- 認知症予防教室で出会った男性が男性サロンのリーダーに…
- 小学校の認知症講座で認知症に興味をもってくれた小学生がわんぱと隊のキッズ隊長に…
- 1人暮らし高齢者の支援がきっかけで親しくなった民生委員さんが外出支援の推進役に…

カフェから飛びたて！ 本人の望みを地域でともかなえ、活躍のバトンをつなげる  
～コロナ禍等のピンチを、地域での新たなチャンスに変える～

神奈川県・大和市 上草柳・中央地域包括支援センター 石毛幸子（兼任 保健師）

キーワード：認知症カフェ、本人の声、社会参加、コロナ禍、地域ケア会議、第2層協議体、希望のリレー、共生

1万人未満

1～5万人未満

5～10万人未満

10～20万人未満

20万人以上

行政/直営包括

委託包括

その他

専任

兼任

●推進員活動情報ダイジェスト

<自治体情報> 2022年4月1日時点

◇人口 242,919人 ◇高齢化率 23.9%  
◇圏域数 11 ◇包括数 9(委託)

<認知症施策のビジョン・方針等>

◆地域全体で認知症の人やその家族等と価値観や体験を共有しながら、誰もが自らに関わることで認知症を理解し、それぞれの望む暮らしを続けられる、認知症とともに歩むまち(大和市認知症1万人時代条例)

<推進員の主な活動>

・施策の推進を市と協働(連絡会、課題別部会等)  
・担当地域の認知症関連の活動・事業等の企画、開催  
・担当地域の認知症の社会資源等の情報の収集・提供  
・包括内の認知症事業の統括

<今回報告する活動>

①認知症カフェでSさんの声から地域での活躍へ展開  
②コロナ禍で活動機会が激減。本人の声から新展開へ

<推進員の配置状況> 2012年度より配置

◇14人(兼任)：市5、委託包括9  
・大和市では推進員を「認知症コンシェルジェ」という名称で配置

<行政と推進員との関係づくり・協働>

・市が「活動の手引き」を作成。推進員全員が共通の考え方で地域の実情に応じた施策推進を行っていくための手引き。  
・行政担当者と推進員全員が、月1回連絡会開催。情報共有をしつつ、方向・方針あわせをしながら進めている。

<活動のプロセス>

①包括主催のカフェに参加するSさん。得意な調理の腕を活かせる場を探し、地域の会食会ボランティア等で活躍が始まる。  
②コロナ禍で活動の機会がなくなったSさんとともに地域ケア会議を開催。メンバーから包丁研ぎボランティアの企画提案があり、新たな活動がスタート。Sさんが突然引越することに！他の本人Aさんが引き継ぐ橋渡しをし、活動が継続中。

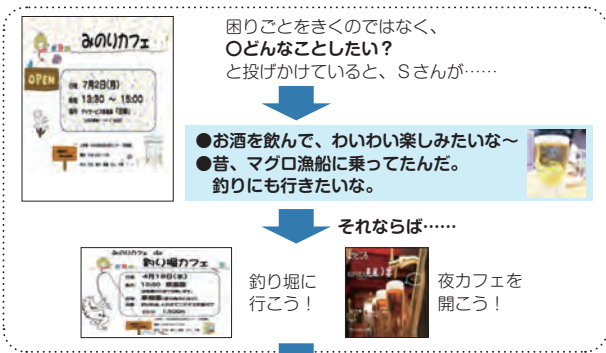
<活動を通じた変化・成果>

本人がカフェの中では出し切れない力を発揮し喜び元気に。地域の人、ボラセンも本人の活躍を喜び、支えあう関係が育つ。

●推進員活動のシーン

一人の声を起点に、望みをかなえる場や人を地域で探し、つながり、活躍と交流機会を一緒に創り、継承

カフェでしたいことを声に出しあい、一緒になえる



カフェから飛びたて！ もっと地域の中で活躍を！

Sさんは、魚をさばくのが得意！  
元調理師でもある。  
調理の腕を活かして活躍できる場がないか……？  
→地域の会食会のボランティアを募集中  
→Sさんも乗り気。調理ボランティア開始  
→包丁研ぎボランティアも始める。



コロナ禍で活動機会が激減。●早く再開してほしいな。

Sさん参加の地域ケア会議開催。何ができるか話しあう

テーマ

Sさんが自分らしく  
暮らし続けるために

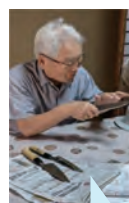
参加者：

Sさん、推進員、自治会長、民生委員、サポーター、第2層協議体代表、生活支援Co、社協ボラセン、市担当者、包括、等



数日後、ボラセンの地区担当者から電話  
包丁研ぎの、企画書作ってみました。

準備を共に進め包丁研ぎボランティア始動！Aさんに継承



地域の支え合いセンターで、月2回、包丁研ぎボランティア。

本人も、地域の人も、センターもメリッ트가生まれ、喜び合う。



Sさん、突然の引越。他の本人Aさんに、打診。「できることあれば！」と快諾！

包丁研ぎを通じた地域活動・地域交流が継承された

みんなが喜んでくれるなら、もっと長生きしなくちゃ～！

# カフェから飛びたて！ 本人の望みを地域でともかなえ、活躍のバトンをつなげる ～コロナ禍等のピンチを、地域での新たなチャンスに変える～

## 1 この活動の背景・きっかけ

- ・当法人のデイサービスの交流スペースで月1回開いている『みのりカフェ』に、認知症の本人Sさんが訪れた。病気のことや困りごとではなく、まずは、どんなことしたいか、楽しいモードで、問いかけてみた。Sさんから出た声は、「お酒飲んで、わいわい楽しみたいな～」、「昔、マグロ漁船に乗ってたんだ。釣りにも行きたいな」。
- そ～なのか～！ Sさんの声を聞いて、何かできないか、Sさん、推進員、カフェに参加協力しているサポーターさん、包括の職員で、アイデアを出しあい話あった。



## 2 この活動のプロセス:最初の一步、その後の展開

### ①カフェの屋外プログラムを企画・実施、そして、カフェから飛びたつ

- ・海釣りまでとはいかないが、釣り堀で釣りをみんなで楽しむ「釣り堀カフェ」を実施。そして法人の協力もえて、月1回17時からの夜カフェを実施。どちらも、Sさんや他の人たちがとても楽しみ、大好評だった。
- ・そんな中でも、Sさんが「漁師だったから魚をさばくのが得意」、「妻を亡くしてからずっと一人暮らし。元調理師もしてたから調理も得意」とつぶやいていた。
- ・Sさんが、本来の力を活かしてもっと活躍できる場がないか……。地域情報にアンテナをはっていたら、高齢者向けの会食会（体制整備事業）が新しく始まり、その調理ボランティアを募集中であること、その説明会があるという情報をキャッチ。
- ・Sさんにそのことを伝えてみたら「行ってみたい」と乗り気。一緒に説明会に参加。Sさんが「やってみたい」ということで、さっそく調理ボランティアをスタートすることに。
- ・Sさんは、見事な調理の仕事ぶり。
- ・やってみながら、包丁研ぎも得意ということがわかり、そのボランティアもスタート。



デイのスペースで、夜カフェ



ボランティア説明会に本人と一緒に参加

### ②コロナ禍で交流や活動が激減。Sさん参加の地域ケア会議から新たな展開へ

- ・集まりの中止が続き、人との交流や楽しみ、活躍する機会がなくなりました。
- ・早く再開してほしい、というSさん。そのうち……。ではなく、今動かなくては。
- ・Sさんの地域ケア会議を開いて、地域の様々な人にSさん自身が思いを届けながら自分らしく暮らし続けていくためにできることを一緒に話しあう。

参加者：Sさん、推進員、自治会長、民生委員、サポーター、第2層協議体代表、生活支援コーディネーター、社協ボラセン、市担当者、包括、担当ケアマネ、合計16名

- ・数日後、ボラセン地区担当さんから包丁研ぎボランティアの企画書を作ってみたという電話が入る。会議参加メンバーが動いてくれた！

\* 支え合いセンター（第2層協議体拠点）でも、もっと地域の人にこの場を知ってほしいという課題があり、Sさんの包丁研ぎ活動の拠点にすることで、互いにWin-Winの効果を期待。

- ・Sさんは喜び、ボランティア登録をする。一緒に新しい砥石を買いに行ったり準備しスタート
- ・Sさんの活躍で地域からも喜ばれ、包丁研ぎボランティアが地域の交流の機会となっていく。そんな中、そんな中、Sさんが突然、引っ越しを余儀なくされる。
- ・地域の他の本人Aさんも包丁研ぎができるという情報が。Aさんに状況を伝えると、「永年の地域への感謝をこめて自分ができることがあれば、恩返しをしていきたい！」と。ボランティア登録を自ら進んでして下さり、包丁研ぎボランティア活動が、継承されることになる。



Sさんがボランティア登録



Aさんがボランティア登録

## 3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

- ◆ 本人が自分らしく、希望をもって暮らし続けられることを第一にした。本人のふだんの声をもみんなで聴き、その人の自分らしさの具体的な手がかりを見つけていった。本人がやりたいことを、どうしたら叶えられるか、みんなで知恵や工夫を出し合い、できることからとにかく動いてみた。動いたことでの小さな成功体験を大事にした。
- ◆ 本人が自分らしく暮らせるキッカケが地域にたくさんある。分野の枠を超えて地域情報を探る。生活支援コーディネーターや社協、町会の人たちなどの情報や知恵を借りる。何より、本人と一緒に戸外に出かけてみることで、本人が興味・関心が湧くことが何か、もっと何をしたいのか、何ができるのかが浮かび上がってくる。

## 4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

- 動けば動くほど、人手が足りない、本人が活躍する場がないなどの課題がでてくる。課題になっていることを地域の様々な人に伝え、相手側の課題とつなげて、一緒にやれることや補いあえる点を見つけていった。

## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

### 【本人】

- ・話さないと言われていた人が、楽しそうに自分から自然に話すようになる。
- ・Sさんは、カフェで楽しそうに過ごされるようになり、さらに活動の場が地域に広がり得意なことで活躍できるようになったことで、地域の人たちからも感謝されながら「これぞ自分」という姿を取り戻していかれた。
- ・Sさんが活躍する姿に触れることで、他の本人たちも、「自分も何かやってみよう」、「地域の役にたてるならうれしい」と前向きに変わっていった。



### 【家族】

- ・本人と同居する家族の声「人に迷惑をかけないように、と集団の場に行かせないようにした。ここに来て、あんなに生き生きした姿を初めてみた。私が大事にしすぎてた」。
- ・離れて暮らす家族の声「本人から『楽しかった』と電話があった。頑固なおじいちゃんなのに、みなさんの関わりでおじいちゃんの味を引き出してくれて、感謝しています」。
- ・当初、施設入所を検討していた家族が、本人が活動を通じて、落ち着きや元気を取り戻していく様子みて「おじいちゃんらしく今の自宅で過ごしてほしい」と変化。

家族も安心、前向きに

安心のある地域に暮らしているんだなど、家族としても安心します

### 【地域】

- ・サポーター「最初はそんなことできるのかと思ったが、やってみると、目をキラキラさせて生き生きと語り始める。スゴいな、と思った」。「地域のつながりで本人が輝くことができる」。
- ・包丁研ぎで交流した地域の人「すごい腕!」「助かる〜。また、お願いしますね」。



### 【専門職・行政】

- ・地域ケア会議を重ねる中で第2層協議体のメンバー「変化を排除するのではなく、「地域で何ができるか」をみんなで知恵を出し合って実践していくことがまちづくりにつながる!」
- ・ボラセン「地域づくりと認知症の人の活動は、お互いに活かしあえる。一緒にやると相乗効果」
- ・ケアマネやケア関係者「介護や医療につなげたり、サービスを使うことをだけでなく、本人と地域とのつながりや地域での活躍をもっと大切に」、「本人が何を望むか、本人の声を聴くことから」
- ・行政「これからは当事者の声をカタチにしたい!もっと当事者の声を聴いてほしい!」



### 【情報の流れや協働】

- ・本人や地域に近い推進員ならではの情報や活動、工夫、成功体験、課題や提案を、市担当者や推進員同士が伝えあい、何でも言いあいながら前向きに一緒に考える流れが定着してきている。



## 6 今後の展望

- ◆本人が自分らしく生き生きと活躍している姿や声にふれると、みんなの認知症への考え方が大きく変わり、知恵や力を出し合って、一緒に取組んでいこうという前向きな流れが生まれる。一人の本人から（小さな）共生体験を生み出し、ともに育てていく活動を、今後もやってみながら、地域の人々や専門職に、自然体で広がっていきたい。
- ◆どの世代にとっても、共生が大きな課題になっており、共生のまちづくりを目指して活動している人、したいと思っている人たちが市内にたくさんいる。それらの人たちとつながりあって地域の仲間をふやし、多様な立場や多世代の人たちとともに、「認知症があってもなくても、地域で自分らしく暮らし続けている」人を、年々着実に増やしていきたい。

### この活動を通して見えてきたポイント

本人が楽しみながら自分で考え、声を出し、一緒に動く機会を日常の中で作り続ける。本音や底力が出てきて、本人の自分らしさが現れてくる。

「私は、こうしたい」という本人の声をまずは受け止める。無理と決めつけず、どうしたらできるか一緒に考える。たとえ実現できなくても、話しあいや工夫のプロセスが大切。

本人抜きで進めずに、「私は、こうしたい」ということを、本人が関係者にリアルに語る機会をつくる。本人の思いの意図や背景を補い、「したい」に賛同してくれる人を増やしていく。

本人の望みをかなえるための場や機会、人などを、アンテナを立てて見つけていく。地域の力を再発見できる。

想定外のことが起きたり、ピンチの時こそ、工夫や新しいつながりが生まれるチャンス。ピンチ時に、本人が少しでも動揺しないように、推進員が揺らぐずに明るく、楽しいモードで、本人と話しあい、できることをいっしょに見つける。

漠然と、全体論で話していても打開策はみつからない。「一人」について個別具体的に話しあっていくと、糸口が見つかる。糸口から次の一歩、その次の一歩が自然と続いていく。

認知症の人としてではなく、一人のその本人と、新鮮に出会う、声を刻み、大切に活かす

みのりカフェ

今日のあの方の一言

平成 30 年 6 月 4 日 開催分

○Yさんがサポーターが持ってきたヤマモモを見て「私もヤマモモを取りに行く！」と笑顔で言われ、立ち上がろうとされました。九州の田舎を思い出され、懐かしそうに、びわ、あじびを取りに行ったお話をされていらっしゃいました。

○Mさん「若い頃からいろいろな事やって来て、これからはもう特に何もいかな…と思っていた。今回、ここ(みのりカフェ)へ来て、まだ面白いようなことがありそうな気がした！」

○Iさん、Sさんの会話で、「親世代は大変だったけれど面白かった、営業で会社が出してくれたお金の何十倍も利益を上げたんだ」と、いきいきとしたお話で話されていた。私も楽しませてもらった。

○Tさん「同じ屋敷の中に子供夫婦と孫が住んでいるが、孫の小さい頃は出入りがあり楽しかったが、今は一日中一人、今日のようなおしゃべりのできる輪に入ることが幸せな一時です」カフェの大切さを感じる。

サポーター： \_\_\_\_\_

カフェに参加協力しているサポーターさんが、カフェを振り返り、耳にした本人の一言と気づきを記録し話合い。毎回積上げてきている。

本人といっしょに過ごしている人だからこそ、聴くことができたその時限りの声。

\*「共にいる」ことの大切さの理解を、みんなで一緒に、体験しながら深めている。

本人の声、望みを地域に発信！：本人とともに楽しく、工夫しながら、一緒にやってみる

包丁研ぎボランティアの地域へのPRチラシをSさんの声をもとに、一緒に作成

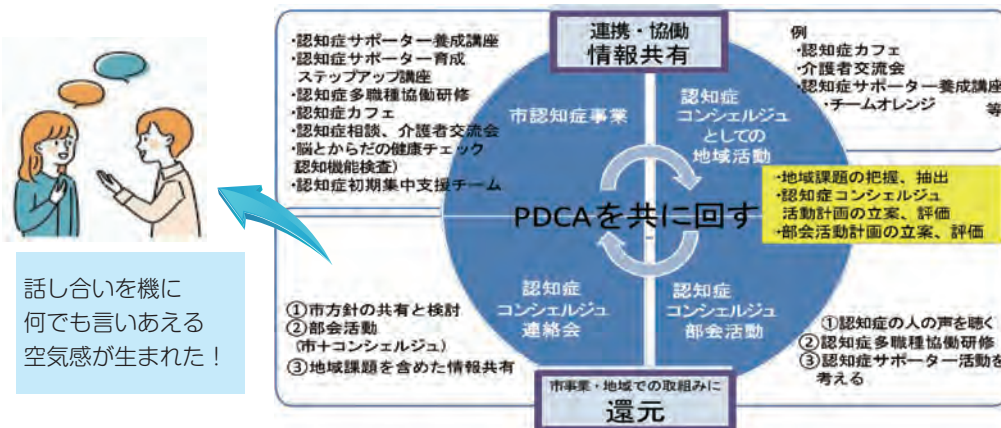
プロセスの中で、やること・できることがたくさん！小さな一つ一つが、本人の社会参加のチャンスに。



チラシ配りを一緒に！

人へのおススメや、説明を一緒に！

大和市と認知症コンシェルジュ（推進員）との連携・協働の構図：立場を活かしあい、共に創る



市と推進員と一緒にやってる感！ よりよいものにしていこう！  
失敗しても大丈夫！トライ&エラーでまずはやってみよう！  
みんなでやれば、どうにかなる！➡やってみながらステップアップ。前向きな循環をみんなでつくる。

[推進員活動情報共有フォーマット]

- ・見えにくい推進員活動を"見える化"してみよう。
  - ・推進員それぞれなりに取り組んだ足跡（プロセスと変化）をコンパクトにまとめてみよう。
  - ・情報共有や振り返り・改善、PRなどに活かそう。
- ※入力用のフォーマットは、DCnetからご入手いただけます。

No.

キーワード：

●推進員活動情報ダイジェスト

<自治体情報>	<推進員の配置状況>
<認知症施策のビジョン・方針等>	<行政と推進員との関係づくり・協働>
<推進員の主な活動>	<活動のプロセス>
<今回報告する活動>	<活動を通じた変化・成果>

●推進員活動のシーン

1万人未満

1～5万人未満

5～10万人未満

10～20万人未満

20万人以上

行政/  
直営包括

委託包括

その他

専任

兼任



1 この活動の背景・きっかけ

---

2 この活動のプロセス:最初の一步、その後の展開

---

3 活動を進める上で大切にしたこと・注力したこと

---

4 活動を進めていく上での壁・苦慮、クリアの仕方など

---



## 5 この活動を通じて生まれた変化・成果

---

【本人】

【家族】

【地域】

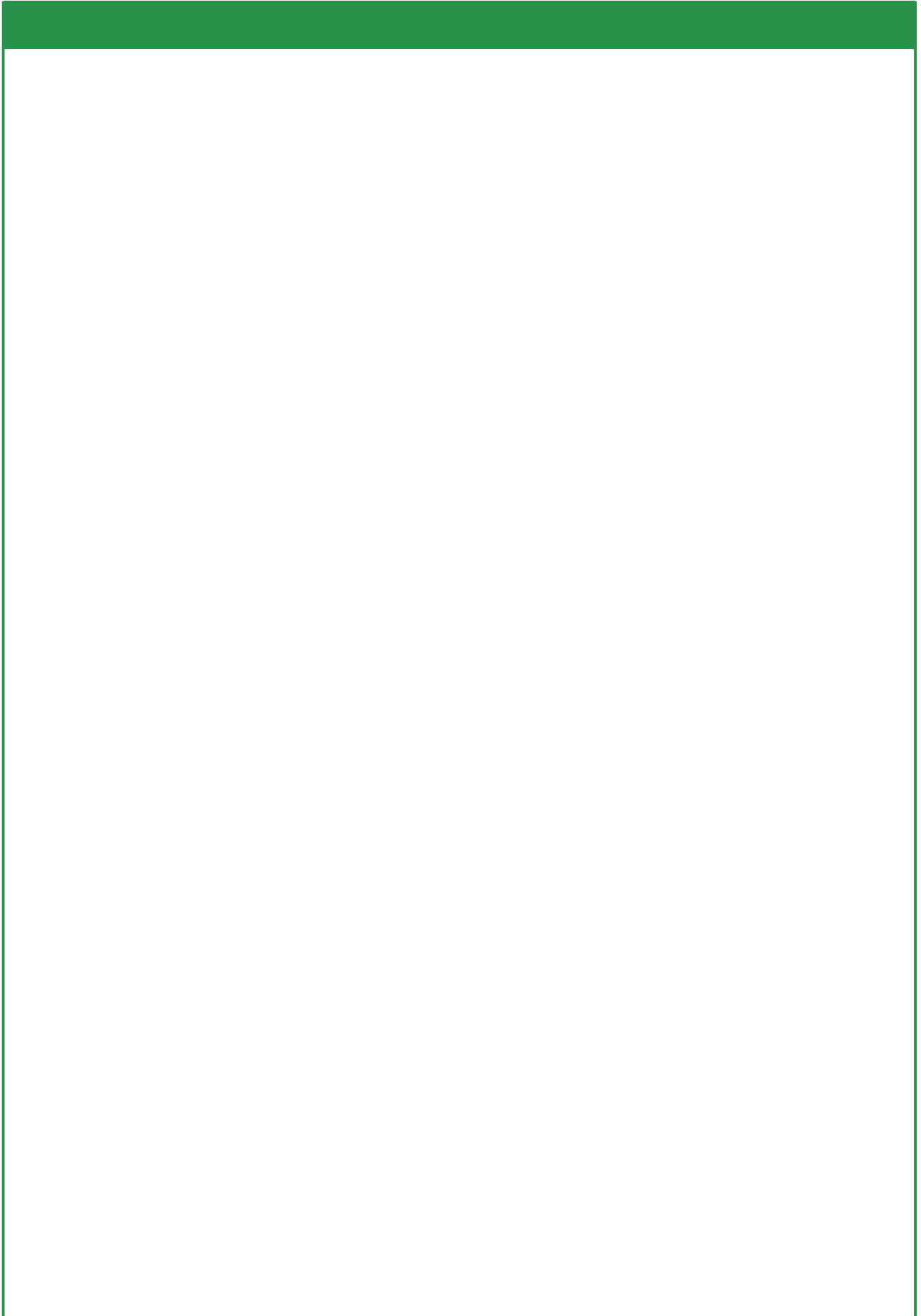
【専門職・行政】

【情報の流れや協働】

## 6 今後の展望

---

この活動を通して見えてきたポイント

# 全国認知症地域支援推進員連絡会 ～ すいしんいんネット ～

「推進員になったけど、これからどうすればいいの？」

「先進的な取り組みをいっぱい知りたいな～」

「地元だけじゃなく、全国の仲間とつながりたい！」

このような希望を叶えるため、

「全国認知症地域支援推進連絡会 ～ すいしんいんネット ～」を  
立ち上げました！！  
**facebook** のアカウントをお持ちの方、

全国の推進員とこの機会に交流しませんか！

又、Facebookをされていない方もこの機会に始めてみませんか？  
「すいしんいんネット」と検索いただくか、QRコードを  
読み取り、申請後、承認されれば仲間入りです！！



．．．． 必ずお読みください ．．．．

すいしんいんネットは、

「認知症地域支援推進員に限定していますが、  
後方支援する自治体等の方もご参加ください。」

- ・事務局で、上記の確認が取れない場合は、承認を保留しています。
- ・申請と同時に必ず、下記のメールアドレスにメールをお願いします。
- ・グループへの参加申請後、質問に必ずご回答ください。
- ・質問に回答、もしくはメールがない方は、申請から一定期間後にリクエストを取り消します。
- ・ご不明な点がございましたら、メールにてご連絡ください。
- ・グループの健全なる運営のため、ご理解とご協力の程、宜しくお願い致します。

すいしんいんネットに関するお問い合わせは

[ [suishinin.net@gmail.com](mailto:suishinin.net@gmail.com) ] まで。

■ 全国認知症地域支援推進員連絡会 事務局 ■



2022年度厚生労働省 老人保健事業推進費等補助金  
老人保健健康増進等事業  
『認知症地域支援推進員 活動情報集・地域共生編』  
～知恵と工夫を、共有！それぞれの地域ならではの共生の実現を～

発行

社会福祉法人浴風会  
認知症介護研究・研修東京センター

〒168-0071東京都杉並区高井戸西1-12-1  
電話 (03) 3334-2173

発行年月 令和5(2023)年3月

制作・印刷 松田印刷株式会社

